闘魂

東京大学運動会
ア式蹴球部100年誌

これからの100年に向けて―

闘魂

これからの100年に向けて―

東京大学運動会
ア式蹴球部100年誌

100周年を迎えた東京大学ア式蹴球部

●この 10 年の東京都リーグでの現役の活躍（2009 年～ 2017 年）



2009年：9年ぶりの1部昇格、胴上げされる吉田主将（2部2位）。



2010年：久木田主将のもと関東大会まであと一歩（1部４位）。



三浦　久保　宮川　道喜　片山　石井　浅井　田中　長尾　今泉　森元

2011年7月31日：京大戦3−0（御殿下）のスタメン（森元主将のもとで1部優勝し、関東大会に挑戦）。



2012年：悔しさを胸に、我らが青春（古賀主将、1部7位）。



2013年：この年から春秋2シーズン制。鹿園部長・利重監督の体制がスタート（長尾主将、1部8位）。



2014年：5年ぶりの2部へ（添田主将、1部9位）。



2015年：運も味方に1年で1部復帰（花嶋主将、2部3位）。



2016年：奮闘及ばず2部へ（北山主将、1部10位）。



2017年：1年で1部復帰ならず（沢登主将、2部6位）。

● 2018 年東京都 2 部リーグ（御殿下グラウンド）:
2 試合を残し圧倒的な強さで 2 部優勝！ 2 年ぶりの 1 部復帰



5月6日：一橋戦での勝利の瞬間（1−0）。



5月27日：玉川戦での得点（3−1）。



6月20日：武蔵戦の試合前の円陣（1−0）。



6月24日：成城戦（6−2）で中沖主将（10番）、山口コーチ他。



9月23日：帝京大に3−1で勝利し、2年ぶりの1部復帰を決める。



9月2日：応援部、アメフット部からエール。

●ベンチで、部室で、グラウンドの外で



2015年：ベンチの一コマ。左の立ち姿は星コーチ、白い帽子は利重監督。



2017年：テクニカルスタッフ。ボードで明確に、分かりやすく！



2015年：部室2階でのミーティング。正面は星コーチ、その右には野口GKコーチ。



2018年：グラウンドスタッフ：2人の連携で手際よく。



2018年7月29日：双青戦（京大戦）の受付。



2017年8月：検見川合宿（記録的な猛暑！）



2015年11月：東経大戦の一コマ。女子マネに支えられ！



2016年7月：京大戦を応援する現役（京大農学部）。



2015年3月：卒部式。父兄と共に祝った。後輩からはどこか淋しげな4年生に見えた。

●元気なLBシニアや若手の活動は大きく広がった！



2007年11月10日：ホームカミングデイでの京大OBとの試合（御殿下）。
前列左から2人目は国際審判員の深野悦子さん、その隣は浅見前理事長。



2010年11月7日：ホームカミングデイでの藤枝FC（白）（御殿下）。
前列中央３人は、浅見、村越（藤枝）、岡野の3氏が並んでいる。



2012年6月28日：東日本大震災を受けて、福島シニア60・70との交流試合を企画。
福島空港公園にLB19名と福島シニア36名が集合して、親善試合・交流会を行った。



2016年10月14日：LB70（SFLリーグ）。故中島裕先輩を偲び、喪章を付けて試合に臨む。
対八王子GM戦（1－0で勝利）。



2017年9月2日：北大、防衛大との3校対抗戦（新小岩の私学事業団グラウンド）。
LB40、50、60と北大（イエロー）、防衛大（ブルー）との交流戦。



2015年7月19日：京大戦の1軍戦に多数のLBが応援。試合は2−1で勝利し、大いに盛り上がった（御殿下の山上会館側）。



2002年8月18日：チームDiego、東京都社会人リーグ2部最終戦。



2013年12月22日：東京カップ戦で優勝（茨木県/つくばアカデミーセンター）。

●女子部は 2014 年に創部。5 年間みんなの力を集めて



2014年：初公式戦にて。



2015年：合同活動チーム「文京LBレディース」の創設。写真はフクダ電子アリーナでの練習試合にて。



成瀬選手の笑顔でのプレー。



大多和選手のロングボール。



大坪主将（2016年）を囲んでのミーティング。



2016年：リーグ戦出場メンバー。



2017年：LB会が贈ったユニフォーム。



2018年：新歓活動（なでしこフェスタ）。

● 2018 年御殿下サッカースクール



ゴール前に集合し過ぎかな?!



高学年には、現役選手が試合中にコーチング。



父兄も多数見守る中で。



男子、女子の現役部員が先生。



鬼ごっこでウォーミングアップ。



先生の手取り、足取り。



女の子と男の子、背中のボールは見える？



女の子のユニフォーム姿、カッコイイ！

● LB 会とア式蹴球部のこの 10 年の活動



2012年5月19日：五月祭のシンポジウム「日本スポーツの未来を考える」。左から鈴木（H25卒）、牛木、岡野、浅見、川瀬（H25卒）の各氏。



2017年5月24日：LB会主催で「岡野俊一郎を語る会」を開催。岡野さんと一緒にボールを蹴ったLBを中心に24名が岡野さんを偲ぶ（文京シビックホール）。



新部室の航空写真（真ん中の水色の屋根が新部室、左は農学部グラウンド）。



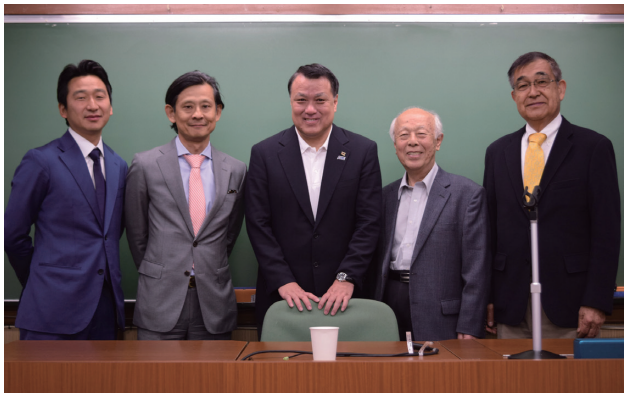
懇談する小山氏（35年）、宇尾氏（39年）。



2018年3月17日：新部室お披露目会での来賓挨拶（左は武田理事長、右は浅見前理事長）。



左から樋口（40年）、山本（31年）浅見（31年）、宮路（47年）の各氏。

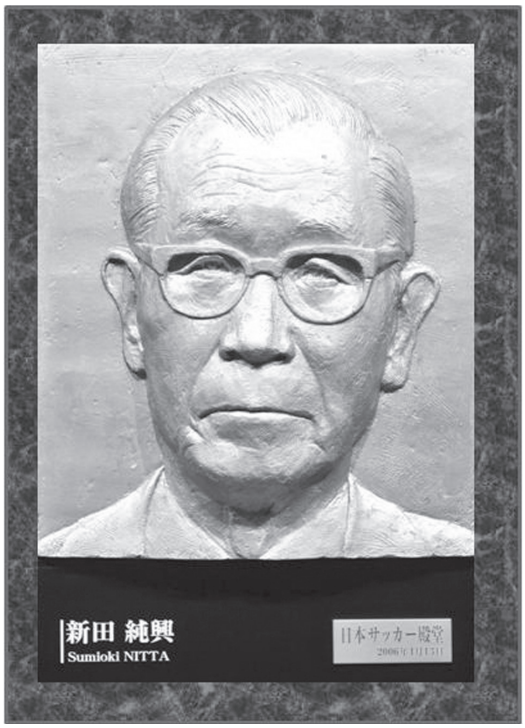


2018年：五月祭。左から福田、利重、田嶋会長、浅見、武田の各氏。

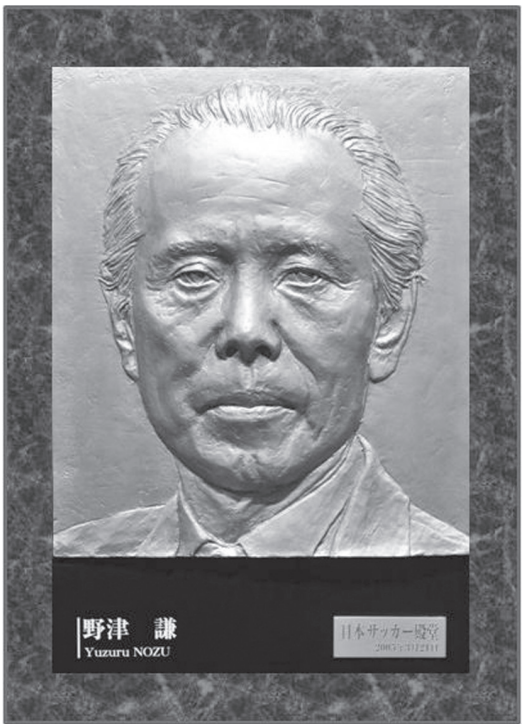


講演する武田理事長。

日本サッカー殿堂入りした東大ＬＢ



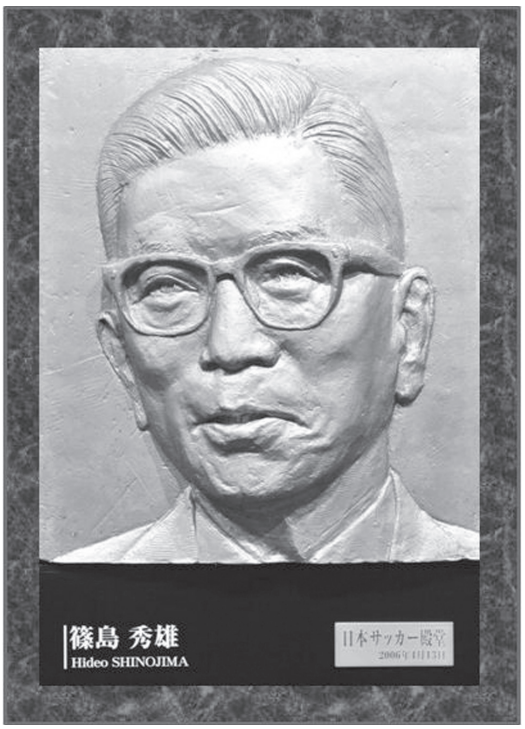
新田純興（にった・すみおき）
日本蹴球協会常務理事
大正11年卒業



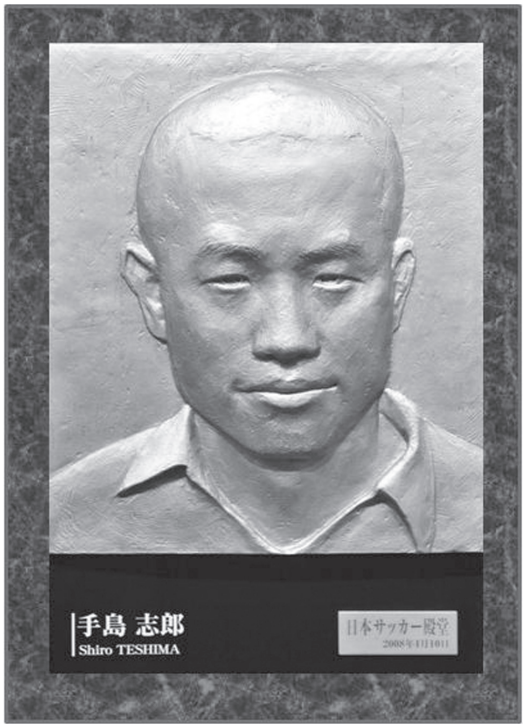
野津　謙（のづ・ゆずる）
日本サッカー協会会長、極東大会日本代表
大正12年卒業



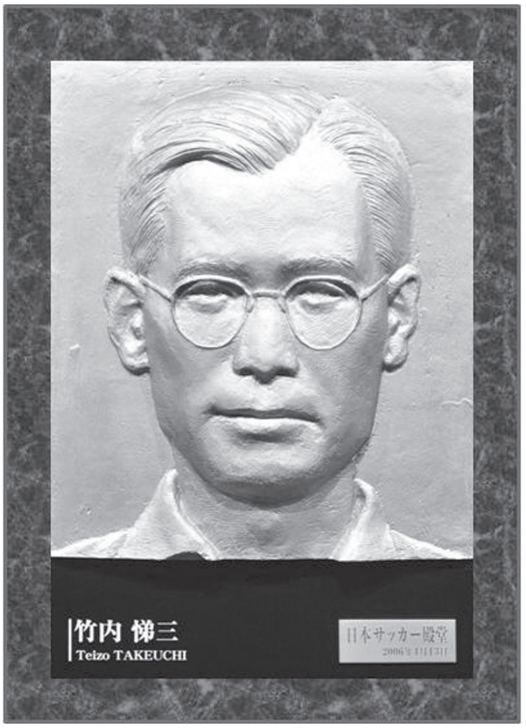
竹腰重丸（たけのこし・しげまる）
日本サッカー協会理事長、極東大会日本代表
昭和４年卒業



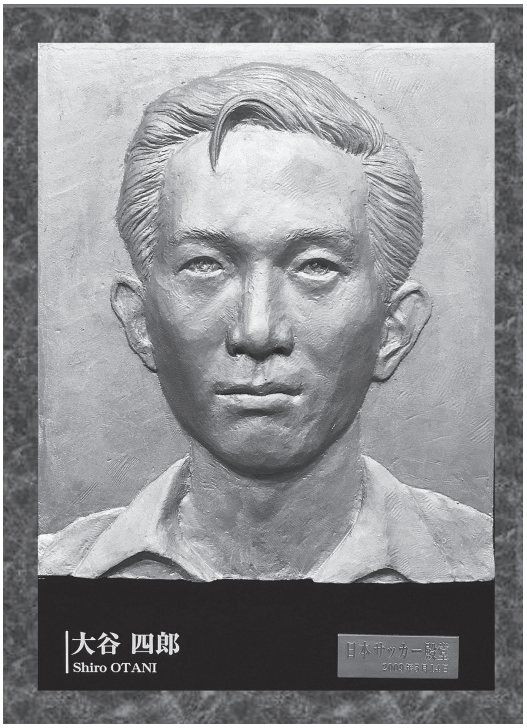
篠島秀雄（しのじま・ひでお）
日本蹴球協会副会長、極東大会日本代表
昭和６年卒業



手島志郎（てしま・しろう）
極東大会日本代表
昭和７年卒業



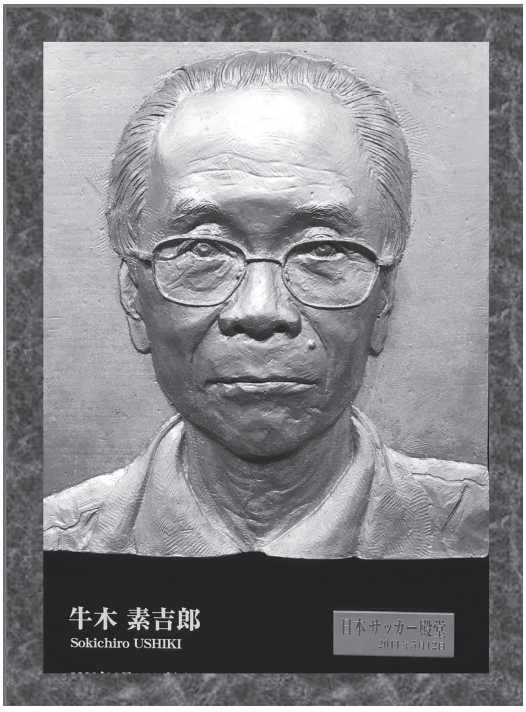
竹内悌三（たけうち・ていぞう）
極東大会、ベルリン五輪日本代表
昭和７年卒業



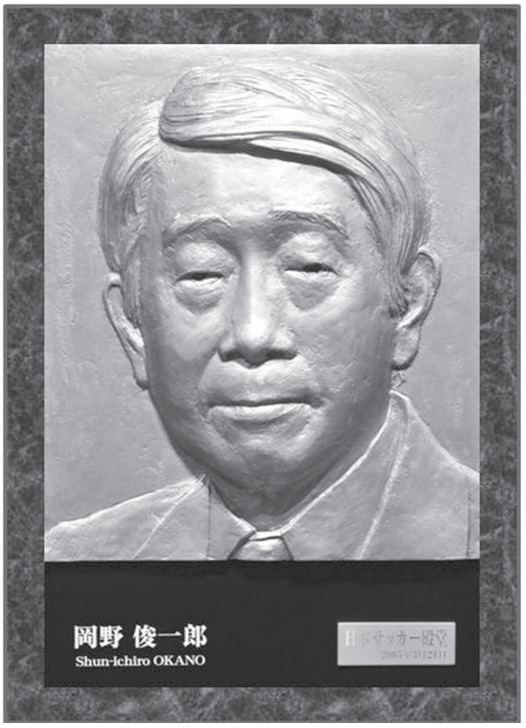
大谷四郎（おおたに・しろう）
朝日新聞社運動部記者、関西協会所属コーチ
昭和18年卒業



浅見俊雄（あさみ・としお）
JFA審判委員長、AFC審判委員会委員
昭和31年卒業



牛木素吉郎（うしき・そきちろう）
読売新聞スポーツ記者、スポーツジャーナリスト
昭和31年卒業



岡野俊一郎（おかの・しゅんいちろう）
日本サッカー協会会長、日本代表選手、監督、コーチ
昭和32年卒業

「日本サッカー殿堂」は、日本サッカーに多大な貢献を果たした人物の栄誉を称える制度で、お茶の水の日本サッカーミュージアムに、殿堂入り各氏のレリーフが展示されている。

2005 年の第 1 回の表彰から 2017 年の 14 回の表彰までに 75 名 1 チームが表彰されており、うち東大卒が 10 名を数えている。

その中で、90 年誌に紹介済みの 7 名を再掲載すると共に、90 年誌以降に殿堂入りされた 3 名を紹介する。再掲載の 7 名は、殿堂入りの順に、2005 年の第 1 回に野津謙、岡野俊一郎、竹腰重丸、2006 年の第 2 回に新田純興、竹内悌三、篠島秀雄、2008 年の第 5 回に手島志郎。90 年誌以降に殿堂入りされた 3 名は、2009 年の第 6 回の大谷四郎、2010 年の第 7 回の浅見俊雄、2011 年の第 8 回の牛木素吉郎である。これら 3 名は日本サッカー協会ホームページに以下の通り紹介されている（紹介記事の抜粋）。

2009 年第 6 回殿堂入りの大谷四郎は、戦中戦後にかけて、プレーヤー、指導者として活躍し、その後は朝日新聞の記者として新聞紙面や著作などを通して、また後援事業の開催や運営を通してサッカーの普及に努めた。

2010 年第 7 回殿堂入りは浅見俊雄。浦和高校や東大でプレーヤーとして活躍した後、1959 年に 1 級審判員となり、以降四半世紀に亘り、日本のトップレフェリーとして活躍。その後も、JFA 審判委員長や AFC 審判委員会委員として日本やアジアの審判レベルの向上に貢献した。

2011 年第 8 回殿堂入りは牛木素吉郎。東大を卒業後、東京新聞、読売新聞でスポーツ記者を務め、スポーツジャーナリストとして活動。特に、1966 年創刊のサッカーマガジンの時評を 40 年以上担当してサッカーの普及に努め、またサッカーのクラブ化やワールドカップへの夢を語り、現在の日本サッカー界の発展に貢献した。

レリーフ写真の著作権は日本サッカー協会にあります。



東京大学ア式蹴球部
創部 100 年記念誌の刊行に当たって

一般社団法人 東大 LB 会
前理事長　浅見俊雄

東京大学運動会に所属するア式蹴球部は、2018 年に創部 100 周年を迎えた。この 10 年前の創部 90 年の時に『東京大学のサッカー　闘魂 90 年の軌跡』という題名の記念誌を発刊した。その内容は創部からその時点までの部の各年代のリーグ戦等の戦績や、日本のサッカーの発展に貢献した東大卒の人材などの歴史をまとめたものであった。また同時に OB たちや東大のサッカーに関わった人たちが、現役時代、あるいは卒業後のサッカーとのかかわり、東大サッカーとのかかわりなどを綴った『東京大学のサッカー　ライトブルーの青春譜』も同時に刊行した。

OB、現役、関係者による記念のパーティーも盛大に実施して東京帝大時代の先輩にも参加していただいた。その時私は東大 LB 会（サッカー部 OB の会）の理事長で、これらの記念行事の責任者でもあった。

なぜ 100 年を待たずに 90 年という半端な時点で記念行事を行ったのかというと、関東大学サッカーリーグの一部で活躍した OB たちがお元気の内に、ということを考えたからである。その予測の通り、東大が全国大会で最後の優勝を果たした 1953 年正月の全国大学選手権大会の決勝戦に出場したイレブン（90 年誌の 12 ページに写真がある）の内、この文の執筆時の生存者は私を含め 3 人のみである。90 年の時は 8 人が生存されていた。ここ 2、3 年で、上記の優勝に貢献した岡野、中島もあの世に旅立たれ、残された私がこの二人への弔文を本誌に書かねばならないことになった。

しかし 100 年はやはり 90 年以上に記念となる年である。この機会に現役と OB とが一度は一堂に会して交流できる機会があっていいし、90 年史の後の 10 年の記録や、 東大ア式蹴球部は何を目指して活動しているのか、OB はなぜ現役の成績に関心を持ち、また現役の活動のために経済的支援をするのか、などなど、クリアなようではっきりしないもののあり方も、OB、現役や関係者が改めて考えるいい機会であるとも思っている。

現役も、これから東大に入ってア式蹴球部でサッカーをする諸君、諸嬢も、何故楽しく遊ぶサッカーではなく、部活という厳しさを伴う活動の中でサッカーをするのか、何故運動会所属のア式蹴球部が、独占的にグラウンドを使う権利を持っているのか、などなど、自分がしているア式蹴球部員としてのサッカー活動をする意味を、ただ好きというだけでなく、もう一つ突き詰めて考えてほしいと思っている。

スポーツでうまくなる、勝てるようになるためには、心、技、体を鍛えることが重要であるとよく言う。技術、戦術を高める方法は練習方法も確立されてきている。心も上がらないようにする手法はある。しかし心をより強く持って、試合で燃え尽きるほどに全力を出し切れる選手はそう見たことがない。東大の大先輩で、日本のサッカーの発展に大きな貢献をした竹腰重丸は試合で全力を出し切ることが出来る稀有の人だった。このことについては『闘魂 90 年の軌跡』に私が書いた文章があるので読んでいただきたい。

一つ一つのプレーにどれだけ心を注げるようになれるか、また 90 分間に全てのエネルギーを注ぎこめるようになれるかによって、集中心とか気持ちの強さが高まり、総体としての能力も高まっていくのだろう。東大ア式蹴球部の練習や試合で、そうした強い意欲、姿勢を見せてほしいと思っている。

男子のア式蹴球部だけでなく、創立間もない女子サッカー部も漸く独り立ちができるようになった。また 1969 年から始まった「御殿下少年少女サッカークラブ」も、現在はア式蹴球部が運営するクラブとして、大学近隣の多数の子どもたちが毎日曜、御殿下グラウンドでサッカーを楽しんでいる。

また卒業後も、多くの OB が LB の年齢別のクラブや企業あるいは地域のチームで、若い人だけでなく 70 代、80 代になってもサッカーを楽しんでいる。

東京大学と公益財団法人日本サッカー協会との間で、平成 28 年 12 月に締結された学術とサッカーとの連携協定を具体化することにも、東京大学ア式蹴球部と LB 会が積極的に関わっていくことが求められるであろう。

大学スポーツはどうあるべきかについても、東大運動会が、そしてア式蹴球部と LB 会がそのあり方を示すモデルになってほしいと願うし、そうなるべきだと強く思っている。

これからの 100 年も、これまでと同様、というよりもより積極的に東大スポーツの、そして日本の大学スポーツと生涯スポーツのあり方を示す良きモデルとして、東京大学ア式蹴球部とその OB、OG たちが、力強く、そして楽しく進んでいってほしい。

そしてサッカーを愛好する多くの方々も、東大のサッカーを温かく見守ってほしいと願っている。

東京大学運動会

ア式蹴球部100年誌

これからの100年に向けて―

●目次●

巻頭グラフ

100周年を迎えた東京大学ア式蹴球部……3
日本サッカー殿堂入りした東大ＬＢ……11

巻頭言

東京大学ア式蹴球部創部100 年記念誌の刊行に当たって　浅見俊雄……14

ごあいさつ　武田　厚……20

東京大学運動会ア式蹴球部　創部100 周年おめでとうございます　南風原 朝和……21
長らくお待たせ致しました　杉山健一……22
東京大学ア式蹴球部創部100 周年　永井利明……24
東大LB 会と千葉大学サッカー部OB 会　大内圭二……25
防大サッカー部草創期における東大OBとのかかわり　長谷川孝一……26
東京大学ア式蹴球部100 周年に寄せて　村越　廣……27

巻頭座談会

次の100年へのキックオフ　浅見俊雄／武田　厚／利重孝夫／俣野泰佑……28

巻頭インタビュー

サッカーを広めたい！　ペンにこめた熱い思い　牛木素吉郎……36
次なる100年に向かって　小山冨士夫……40
ア式でキャプテンを務めるということ　鹿園直毅……44

第1部

次の100 年に向けた新たな動き――この10 年の軌跡

次の100 年に向けた新たな動き❶

生涯サッカー

〈シニアサッカー 50 ～70代の活動〉

LBシニアの年間活動記録　井田　淳……51
東大サッカーが日本サッカーの発展に寄与したもの　折原一雄……54
1964 年の東京オリンピックを目の当たりにした衝撃　樋口周嘉……58
シニアサッカー大会への挑戦と変遷　池森俊文……62

〈若手OBの活動の歴史〉

御殿下クラブに始まり、Ｊリーグをのぞむ　吉澤伸明／井田　淳／胡内健一……66

次の100年に向けた新たな動き❷

国際交流

オックスフォード大との国際親善試合（2014年12月）……71
タイ遠征レポート（2015年11月）　坂本晋吾……72
オックスフォード大学へのサッカー？留学　角田貴大……75
ソウル大学との交流戦　張 暎洙……77

次の100年に向けた新たな動き❸

女子部創設

創部 —「東大」×「女子サッカー」の可能性　大多和 愛……79
ア式女子　4年間のキセキ　大坪 佳夏子……82

次の100年に向けた新たな動き❹

地域交流

〈LB-BRB TOKYOの設立と東京ユナイテッド、文京レディースの活躍〉
“ア式の未来100年モデル”　福田　雅……91
〈御殿下サッカースクール〉
50年を迎える御殿下サッカースクール　～御殿下サッカースクール2018　武田　厚……98
“どんな時でも均等に”——御殿下サッカースクールのモットーです　兵頭圭介……102
教師となって　御殿下での学びは現在も生きています　佐々木　務……104
父への想い、少年サッカーの日々、Jクラブの仕事　戸苅　淳……108
御殿下少年サッカースクール　一期生同窓会　池田吉彦……112
御殿下少年サッカースクールでの思い出　藤井幹也……123
座談会：御殿下サッカースクールのこれから　山本　健／細井　隼／利重孝夫……124

次の100年に向けた新たな動き❺

この10年の軌跡

新部室完成に至る長い道のり　吉澤伸明……129
田嶋幸三日本サッカー協会会長講演　～東京大学ア式蹴球部100周年特別記念講演…135
文京区長 成澤廣修氏に聞く　——スポーツと地域の発展……138
東大と日本サッカー協会がスポーツ連携協定を締結……142
「日本サッカーと東大」十大トピックス……144
2017年五月祭パネルディスカッション“これからの「サッカー」の話をしよう”……145
2018年ホームカミングデイ……148

第2部

この10年の記録

90年誌の空白を埋める
—戦時下（1943 年度）の関東大学サッカーリーグの記録　浅見俊雄…… 150

2009年度　谷間の世代 昇格への道　後藤遷也…… 152
2010年度　タカマリズム　久木田紳吾 …… 154
2011年度　都1部優勝、関東大会へ　森元規裕 …… 156
2012年度　我らが青春　古賀久善…… 158
2013年度　前後期制への挑戦　長尾林太郎 …… 160
2014年度　５年ぶり東京都2部へ無念の降格　添田隆司 …… 162
2015年度　都１部への一年復帰果たす　花嶋　陽…… 164
2016年度　東京都1部で戦い　北山　淳 …… 166
2017年度　ア式とア式の外　沢登孝介…… 168
2018年度　東大復活、都2部圧倒優勝　中沖　隼 …… 170
2014年度女子　関東大学女子サッカーリーグ3部に参戦　大坪佳夏子…… 172
2015年度女子　2年目のリーグ戦、快調な滑り出し　大坪佳夏子 …… 174
2016年度女子　3度目の大学リーグ　大坪佳夏子 …… 176
2017年度女子　4度目の関東大学女子サッカーリーグ　小尾真里奈 …… 178
2018年度女子　初めて東大生だけで出場した5度目のリーグ戦　水谷優香…… 180

第3部

寄稿・インタビュー

追　悼

須賀監督を偲んで　梅村　洋 …… 184
田村三郎監督を偲ぶ　小山冨士夫 …… 186
畏敬する先輩　故岡野俊一郎さんへのレクイエム　浅見俊雄 …… 187
超OB サッカーのレジェンド　中島裕への挽歌　浅見俊雄 …… 189
高田監督の想い出　平田　攻 …… 192

活躍するOB の声

ア式の後輩たちが続く道に　利重孝夫 …… 194
誰も挑戦したことのないことに挑戦する！　久木田紳吾…… 198
卒業生がスポーツビジネス業界で働ける環境を実現させたい！　添田隆司…… 202

卒業生・現役の寄稿

《LB》
途切れなかった縁に感謝　折原一雄 …… 208
見果てぬ夢　新井佼一…… 209

54 年前　樋口周嘉 …… 210
サッカー部の思い出　北川　薫 …… 212
一人のシニアサッカーマンより　藪内俊和 …… 213
関東リーグ復帰を目指して　内田純司 …… 215
サッカーととも（高校〜シニアサッカー：生涯現役）　笠原昌行…… 216
雑　感　兵頭圭介…… 218
『闘魂』の歴史　池田吉彦 …… 219
命の値段　山崎隆志…… 224
サッカーは貧困を救うか？　吉江建一 …… 225
関西LB 創生記　牛窪健一 …… 226
100 周年記念ポロシャツ製作裏話　福澤伸哉…… 228
ア式の環境の中で何をするのか（現役の時に考え、実行していったこと）　和田康太郎 …… 229
東大ア式蹴球部　Ｊリーグ発足前夜の秘かな昇格物語　小泉泰郎 …… 231
関東に近づいた日　胡内健一 …… 232

《同期への追悼》
八林秀一君を偲ぶ　藪内俊和 …… 234
金丸仁追悼文　手島直幸…… 235
同期の絆　御園愼一郎 …… 237
太一追悼文　藤原真一…… 239
同期 安秀和君　追悼文　高木　智 …… 240
追悼　今井勝典君（昭和63 年卒）　伊藤　洋 …… 241

《コーチへ寄せる》
林健太郎コーチへ　宮川啓輝 …… 243
健太郎さんとの思い出　有山大樹 …… 244
星貴洋コーチのこと　酒井加里武 …… 245
野口桂佑GKコーチへ　石川悠吾 …… 247

岩政新コーチと工藤副主将の対談…… 249

《現　役》
小尾真里奈／水谷優香／平田佳織／小倉優香／松坂大和
／大谷拓也／山口 遼／小坂　彩／森本和人／糸谷　歩 …… 252

第4部

年表・名簿

年表……264　／　東大LB会員　東京大学ア式蹴球部員名簿……280

編集後記……288



ごあいさつ

一般社団法人 東大 LB 会
理事長　武田　厚

東京大学ア式蹴球部は、本年（2018 年）で創部 100 年となりました。われわれは、この記念すべき年をどのように迎え、次世代に何を残すか、検討を重ねてきました。

３月の新部室のお披露目に始まり、五月祭でのシンポジウム開催、７月の京大戦、10 月のホームカミングデーと節目で行事を執り行いました。その都度、現役諸君、ＬＢ会員、そして関係する皆様方と思いを新たにしてきましたが、その集大成として本誌を刊行する運びとなりました。

ア式蹴球部 100 年の歴史は、日本サッカーの草創期にその礎を築き、戦前戦後を通じて、一貫して日本のサッカー界をリードしてきた足跡でもあります。そしてまた、その歴史と伝統については、10 年前に発刊した 90 年誌である『闘魂 90 年の軌跡』において十分に整理され、皆様と共有してまいりました。従って、この度の 100 年記念誌では、過去を振り返りつつも、むしろ、『闘魂〜これからの 100 年』と銘打って、ア式蹴球部が今後どうなっていくべきか、その展望を開陳することに主眼をおきました。

90 年誌の編纂からまだ 10 年しか経っていないわけですが、実は、この 10 年間にア式蹴球部を取り巻く環境は大きく変わりました。例えば、シニア層の活動は、層が厚みを増し、今年はＬB75 が結成される等、益々活発になっています。女子部は創部から５年が経過し、いよいよ充実してきました。また御殿下少年少女サッカースクールは創立 50 周年を迎えようとしています。

一方で、東京大学自体も、単なる「学問の府」から脱皮して、広く産業界との繋がりを深めるとともに、地域との連携に力を入れるという流れを加速させています。

こうした流れの中で大学スポーツそのものの在り方が問われ、その活動の変革が求められているともいえます。3 年前に設立された、一般社団法人「ＣＬＵＢ　ＬＢ＆ＢＲＢ TOKYO」と、その傘下にある男子の「TOKYO　UNITED　FC」、女子の「文京 LB レディース」は、ア式蹴球部を介して、東京大学と地域とを繋ぐ存在として、極めてユニークな動きだといえます。そして、それは、正に東京大学が目指す方向と合致したものと考えられ、今後、LB 会としても、その動きをよく見守り支援していきたいと考えます。

本誌は、前述のとおり、ア式蹴球部のこれからを語り、示そうという主旨で、関係する皆様のご協力を頂き刊行することができました。寄稿いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。また、ア式蹴球部 100 年記念のために多くの企業から協賛金をいただきました。ここに改めて、深く感謝申し上げる次第です。

ア式蹴球部は 100 年の歴史と伝統を受け継ぎながらも大学サッカーの新しい姿を求め、未来へ向けての挑戦を続けていきます。卒部生の組織である東大ＬＢ会のメンバーも、それぞれが、年齢に合わせてサッカーを生涯の友として楽しんでいこうとしています。

これからも一層のご支援、ご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成 30（2018）年 12 月



東京大学運動会ア式蹴球部
創部 100 周年おめでとうございます

一般財団法人東京大学運動会
理事長　南風原 朝和

この度は、東京大学運動会ア式蹴球部が創設 100 周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。また、この 100 年の歴史の中で、ア式蹴球部に関わる皆様には東京大学運動会の活動に多くのご支援を賜わりましたこと、深く御礼申し上げます。

この 100 周年記念誌が出版される頃には、サッカーワールドカップの話題も少し落ち着いているでしょうか。「サムライブルー」として親しまれている日本代表のユニフォームカラーである「青」が、東京大学のスクールカラーである「淡青」に大きく関係しているということを、ア式蹴球部のホームページで知り、たいへん驚きました。1930 年に開催された極東選手権において、初めて複数チームから選手が選抜された「サッカー日本代表」が結成された際、東京帝国大学ア式蹴球部から多くの選手が選出されたことで、ア式蹴球部のライトブルーのユニフォームが採用されたとのことです。このエピソード一つをとっても、東京大学運動会ア式蹴球部が日本サッカー界を牽引し、ともに歩んできた長い歴史を感じさせます。

そして、この長い歴史の中で、ア式蹴球部は多様な人材を社会に送り出してきました。先述したように、黎明期には数々の日本代表選手を輩出するなど、その活躍はまさに当時の日本サッカー界を牽引する存在であったと聞いています。最近では、2011 年に久木田紳吾選手が東京大学史上初のＪリーグ選手となり、2015 年には添田隆司選手が続いてＪリーガーになりました。もちろん、プロサッカーの世界に限らず、様々な方面でア式蹴球部出身者の活躍を耳にする機会があります。これだけ多様性に富んだ人材が輩出されていくのはなぜか。このことに関連して、『ＬＢ会報Ｎo.17』に、2017 年からア式蹴球部のコーチとして指導にあたっている岩政大樹氏の印象深い言葉がありました。

「ア式は勝てばいいという話ではない。一つの試合に勝ったからといってそれから先の人生が豊かになるわけではない。サッカーによって学び、部員たちがア式で積む経験をそれぞれの未来に活かし、それぞれの未来に繋げてほしい」。
（『LB 会報 No.17』p.7 より抜粋）

東京大学の運動部で活動する意義のみならず、大学スポーツの持つ理念がこの言葉に凝縮されているのではないでしょうか。私は東京大学運動会理事長として、運動部が大会等で活躍することと同じく、運動部での活動を経て卒業された方々が社会を支え、社会に新しい価値を創出し、社会を変革させている「その後の活躍」を知ることが何よりの喜びです。これから始まる新しい 100 年の歴史においても、東京大学運動会ア式蹴球部が多様な人材を社会に送り出す魅力ある団体として、東京大学運動会発展の原動力であり続けることを期待しています。

結びに、東京大学運動会ア式蹴球部の今後益々のご隆盛と、皆様のご活躍を祈念いたしましてお祝いの言葉とさせていただきます。



長らくお待たせ致しました

東京大学総長室
顧問　杉山健一

「長らくお待たせ致しました」ア式蹴球部の新部室完成に対する正直な感想である。大学側の関係者の一人として、またこの件に携わった者として、この経緯を遺しておきたい。

まず簡単に自己紹介させて頂きます。私は昭和 40 年に入学し、藪内俊和さん達と共にア式蹴球部に入部した。約 1 年間、御殿下グラウンドでの練習や検見川合宿に参加した。しかし、時々両足首の痛みに襲われ、その原因が両足首のくるぶし部分が脱臼しやすい構造であると判った。一方で一年生の夏に鍋島厚さん達と山中寮の寮委員をやった経験から、運動会総務の役割に興味をもっていた。こうしたことから、ア式蹴球部でのプレイを諦め退部し運動会総務部に転部し、卒業まで所属した。現在は同期の皆さんのご厚意もあり、LB 会のメンバーに加えて頂き、時々同期会にも参加している。御殿下グラウンドで一人でボールを蹴っている時、見知らぬ年配の方にキックの仕方について親切にご指導頂いた。後日その方が大先輩の竹腰重丸さんであったことを知り、驚くとともに感激した。私にとって大事な良き思い出である。

さて私は民間企業でほぼ 60 歳の定年まで勤務し退職した後、縁あって東京大学の基金活動をお手伝いすることになった。2007 年から 2011 年まで、渉外本部長として寄附集めに従事したが、その在任中に LB 会より部室立て替えの申し入れがあり、担当部門や担当役員との間を繋ぐことや相談に乗ることの役割を担ってきた。

2010 年、御殿下グラウンドの人工芝が張り替えられ、農学部グラウンドも土から人工芝になった。この年の 4 月、東大 LB 会から東京大学に「御殿下ルネッサンスプロジェクト」（GOTENSHITA Renaissance Project：GRP）が提案された。これは東大 LB 会が 2007 年 1 月、御殿下グラウンドの再生を願ってプロジェクトチームを組織し検討したもので、概略以下の内容であった。因みにこれは同期の大塚隆さんの基本設計であった。

- 御殿下ハウス（仮称）の新設
  場所・規模：七徳堂に隣接する高台（病院側）、約 130 坪
  設備：更衣室、シャワー、トイレ、ロッカー各男女別、選手控え室、審判控室
  構造：RC 造り、2 階建、鉄骨造屋根

- 観客席の新設
  場所・規模：御殿下グラウンド東側（病院側）
  設備：1 階　本部席、チームベンチ席、トイレ、用具庫
  　　2 階　162 席＝ 18 席× 3 列× 3 段

この提案に対して学内調整を試みたが、御殿下ハウス（仮称）については当該の場所の管理者である医学部の承諾が得られず、また観客席についても、当時御殿下グラウンド地下の構造計画が検討されており、着工の見通しが立たないことから何れも断念せざるを得

なかった。当時の浅見俊雄理事長と樋口周嘉事務局長を落胆させる結果となってしまったが、将来いつの日か実現して欲しいプロジェクトである。

東大ＬＢ会は 2013 年以降、部室建替えに絞り新たに「新部室建設プロジェクト」を立ち上げ、武田厚副理事長と宮路康利事務局長および吉澤伸明さんが担当されることになった。

ＬＢ会からの提案に対し東京大学側の対応は時間が掛かったり、二転三転するときがあった。

本郷キャンパス内にある多くの建築確認申請を行っていない未申請建物（未計画通知建物）の撤去を東京都から要請され、サッカー部の部室もその対象とした。

→その後東京都との折衝により、存続できることになった。

2011 年頃に見直し改訂したキャンパス計画には現部室のある場所は将来緑地にすることになっており、この計画を変更する必要がある。

→その後、再度見直しされ存続できることになった。

建替え費用について、当初のＬＢ会の提案は半額をＬＢ会が、残りの半額を大学で負担して欲しいというものであった。東大は運営費交付金や設備費の減額により財政事情の悪化および特定の運動部のみを支援することはしないことを理由に、費用負担はしない方針であった。

→ＬＢ会は部室建設費が当初よりも高騰していく中にあったが、2014 年に全額寄附による部室の建替えを視野に入れることとし、2015 年に東大側に「全額ＬＢ会負担での部室建替え」を提案した。

寄附金のうち 10％は全学のスポーツ振興のため「スポーツ振興基金」に、5％は本部にまわすので 85％が部室建替えとして使用できる。

→ＬＢ会の粘り強い交渉の結果、スポーツ振興基金にまわる 10％も部室建替えに使用できることになった。

そして 2015 年 8 月に大学側（学生支援部）から①部室建替え費用の全額を寄附する。②当該部室の位置づけについては大学と協力的に協議の上、大学の方針に基づくことを確認する書類（確認書）を提出する。この 2 つの条件を前提に現在地での建替えが認められた。そして役員会での承認や南風原担当理事と浅見ＬＢ会理事長との会談を経て、2015 年 9 月このプロジェクトの実行が決定、確認された。

2007 年「御殿下ルネッサンスプロジェクト」に着手してから 11 年を経て、しかも建設コストが当初の見積り額より 1.5 倍も高くなる中で 2018 年 2 月、新部室が完成した。この間の浅見俊雄前理事長、武田厚理事長をはじめとするＬＢ会の皆さんの粘り強い努力に対し改めて敬意を表したい。私個人としては、お世話になったア式蹴球部にささやかながら恩返しできたかなと思う。



東京大学ア式蹴球部創部 100 周年

京都大学蹴球部 OB クラブ
会長　永井利明

東京大学ア式蹴球部創部 100 周年を迎えられること、誠におめでとうございます。京都大学蹴球部および OB クラブを代表して心よりお祝い申し上げます。東京大学ア式蹴球部の歴史は学生サッカーだけではなく、日本サッカー界の礎を築き上げ、牽引し、多大な貢献をしてきた歴史だと認識しております。

歴史を振り返りますと、東大は関東学生リーグで 1926 年から 1931 年まで 6 連覇という偉業を達成していますが、京大も関西学生リーグで 1932 年から 1934 年まで 3 連覇を達成しています。過去の栄光を引っ張るわけではありませんが、先輩諸氏が長年築いてきたこの伝統は常に次代に引き継がれるべきものだと考えております。

個人的に東大の大先輩の中で記憶しているのは竹腰重丸氏とやはり岡野俊一郎氏です。今でこそ多くのサッカーに関する情報が満ちていますが、私が中学生の頃サッカー教本といえば竹腰重丸氏の「サッカー」しかなかったと記憶しています。そして「ダイヤモンドサッカー」の岡野俊一郎氏の解説です。その頃は海外のサッカーの情報に飢えており、毎週楽しみにテレビに齧り付いていました。その岡野氏とはいつでしたか東大定期戦の OB 戦にて対面で試合をした記憶があります。もちろん忖度させていただきました。

京大・東大定期戦は 1949 年からスタートしております。私自身の現役時代（1972–1975）の 4 年間は 1 分け 3 敗で勝利がありません。毎年前期の総仕上げであり、東大には意地でも負けたくありませんでした。当時関西学生リーグの 1 部でプレーしており、試合後のレセプションでは勝負に負けても、1 部の意地において口では勝っていたように思います。

51 年卒の東大同期とは、現役の時からのお付き合いで、卒業後も泥蹴会の特別会員にしていただき、毎年恒例の東大ダックス、一橋大シニアの三つ巴戦に参加させていただいています。また京大 OB シニア中心の男組には多数の東大 LB の方々に参加していただき、生涯現役に向けてサッカーを楽しんでいるところです。

京大の特色は私の時代も含め代々学生主体の自主運営にて活動しているところです。現在メンバーは 80 人を超える多人数ですが、監督・コーチは OB のボランティアでほとんど試合のみ観戦、常にキャプテンが中心になり、メニュー班、フィジカル部、スカウティング班等、学生にて担当を決め、試合の出場メンバー、練習メニューの決定、スケジュール調整等すべて学生のみで行っています。このような運営体制は資本力のない国公立大学の模範となるのではと思っています。

東大はプロの監督・コーチにより指導体制ができており、運営方法は違いますが、おかれている条件は同じで、今後とも切磋琢磨して、学問だけではなくサッカーにおいても東西の雄として国公立大学を牽引していけるよう期待したいところです。

最後になりますが、今後の東京大学ア式蹴球部と東大 LB 会のますますのご発展と、東大・京大両校の現役・OB のより一層の交流を祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

東大 LB 会と千葉大学サッカー部 OB 会

千葉大学サッカー部 OB 会
大内圭二（1959 年卒）

東大 LB 会と千葉大サッカー部 OB 会とのつながりは、2009 年千葉大学サッカー部 OB 会が一時休止していた活動の再開の折から始められました。

活動の再開に当たって、OB 会の活動を幅広く積極的に展開している東大 LB 会を手本にと考え、親交のあった東大 LB 会の中島裕さん（東京四十雀、1956 年卒）、西野宏さん（AC ちば、1958 年卒）の力をお借りしようという事になり、再開の記念パーティ並びに親善ゲームにお呼びした所、当時 LB 会の会長であった浅見俊雄さん（1956 年卒）にもご出席頂き、励ましの言葉を頂きました、それ以来親交を続けています。

1955 年まで中島さんは東大サッカー部の主力選手として、関東大学リーグ一部で活躍され、卒業後は大学院進学予定で最後の春休みの事でした。関東大学リーグの弱小チームレベルアップのため、当時の関東学生蹴球協会の会長であった有馬洪さん（東大 OB、1941 年卒）より強化コーチに指名されたと聞いています。有馬さんの義弟（瀬田春生 1959 年卒）が千葉大学サッカー部の部員であったこともあり指名されたのかも知れませんが、詳しい事は判りません。

年齢も選手に近くまた飾らない中島さんの人柄で熱心に指導頂いた事を覚えています。その頃の千葉大学は関東リーグ三部の上位に居ました。チームの技術レベルは低かったのですが、短期の合宿であったためか、技術より体力作りを重点にと、連日走り込みの指導できつかった事を覚えています。当時私は最下級生で、大学リーグ一部で活躍していた中島さんは雲の上の人で殆ど話をした事は有りませんでしたが、合宿の最終日に君はサイドハーフにポジションを変えると言われ、それ以来卒業まで左のサイドハーフでプレーする事になりました。

私は卒業以来 30 年程関東地区を離れていましたので、中島さんと再会したのは確か 2006 年頃かと思いますが、駒沢グランドでお会いしご挨拶し、それ以来親しく接して頂きました。その折に知ったのですが千葉大学サッカー部 OB の近藤之男（1961 年卒）が社会人サッカーチームの明治製菓に在籍していた折に、中島さんと同じチームでご指導を受けたとの事、等も加えてより親交が深まりました。

2009 年以来東大 LB 会と千葉大学サッカー部 OB 会との交流は続けられ、親善試合には欠かさず中島さんの参加を頂き、千葉大学サッカー部 OB 会の活動にご協力頂けました事たいへん感謝し、故人の温かい人柄を偲び、亡くなられました事が残念でなりません。

最後になりますが、東大 LB 会の皆様には親善試合を通じて親交の機会が続けられ、千葉大学サッカー部 OB 会一同はこれを楽しみにしています。親善試合の後の交流会も我々の楽しみとなっています。長い伝統がありその上にサッカー界の中に広い人脈を持つ東大 LB 会には遠く及びませんが、少しでも近づけるよう、今後も活動を続けると共に、東大 LB 会の今後益々のご発展を願っています。



2009年千葉大学サッカー部60周年祝賀パーティー。左より、中島裕さん、浅見俊雄さん、大内圭二（筆者）当時のOB会会長。

防大サッカー部草創期における東大ＯＢとのかかわり

防衛大学校サッカー部ＯＢ会
長谷川孝一

東大サッカー部創設 100 周年、おめでとうございます。100 年、すごいですね。

昨年の９月と今年の２月に東大 OB 会と防大 OB 会との対抗試合が行われました。これは、長年続いている防大 OB 会と北海道大 OB 会との対抗試合に、新たに東大が加わって３大学対抗戦へ発展したことによるものです。OB 戦への参加者の年齢幅がかなり大きいので、80 歳を過ぎた方を含む高齢者組の試合は若年組と分けて行い、こちらは自ずと楽しみサッカーとなり、試合後の懇親会はアルコールも入って盛り上がりました。２月の懇親会の席で、防大サッカー部草創期に東大 OB の岡野俊一郎さんとの接触があった話が出たことがきっかけで、今回記念誌への寄稿を求められました。60 年も前のことですので記憶に怪しいところもありますが、思い出せる限りを綴ります。

防大サッカー部は第１期生が入校した昭和 28 年(1953)に出来ましたので、今年が 65 周年になります。当時スポーツの大学対抗戦と言えば野球が一番、ラグビーがそれに次いでいたでしょうか。サッカーもまあまあだったと思いますが、新設の防衛大は地方で見る見るうちに頭角を現し、一目置かれるようになりました。

初代サッカー部長は東大で名キーパーを務めた阿部鵬二先生（英文学教授)。口癖が「頭の悪い奴にはサッカーは出来ない。頭を使え！」。そこへきて初代監督は、メキシコオリンピック３位監督の長沼健さんを広島高等師範付属時代にしごいたという景山昭二先生（応用物理助教授、北大出身)。毎日グランドへ出て目を光らせておられたものだから、学業よりもこちらへ力を注がざるを得ませんでした。

昔は全日本大学選手権大会を正月に東京で行っていました。昭和 32 年の正月に防大はなんとベスト４に勝ち残り、地方のダークホースと騒がれました。その年の８月だったと思いますが夏の合宿を避暑地？東京に張り、東大の御殿下と農学部のグランドを使わせてもらいました。写真は御殿下のゴールポスト前で写したもので、１期生は卒業して不在、２期生以下が入っています。岡野俊一郎さんの教えを受けたのは、確かその頃だったと思います。私のような大学で初めてサッカー部に籍を置いた者には、目からうろこの感でした。

もう一つ、東大 OB の竹腰重丸さんにも教えを受けたことがありますが、何時どこであったかはよく覚えていません。竹腰さんには昭和 42 年に自衛隊の有志が全国大会を立ち上げる時、日本蹴球協会の理事長として大変な御骨折りを頂きました。この大会は爾来日本サッカー協会後援のもと防大 OB が中心となって運営されており、つい先日（平成 30 年４月）第 52 回大会を、味の素フィールド西が丘サッカー場で終えました。

宴席での大法螺をアテに寄稿を要望された幹事さんに対して、中身の薄い文章でしかお答え出来ず恥じ入ります。今後大勢の東大 OB 諸氏の対抗戦へのご参加を、特に風光明媚な防大グランドへは、見物を兼ねてお出で頂ければと願っています。防大 OB は現役自衛官と定年退職した者が入り混じっており、ベテランパイロットや護衛艦の艦長、国際平和維持活動での海外勤務経験者などいろいろ居て、話をするだけでも面白いと思います。（筆者は防大卒業第２期生、４千時間を超える戦闘機パイロット、元空将）



昭和32年夏の合宿、東大御殿下グラウンド（前列右端が筆者)。

東京大学ア式蹴球部100周年に寄せて



藤枝フットボールクラブ
代表　村越　廣

日本サッカー界の歴史を刻んできた、東京大学ア式蹴球部が100周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。

サッカーを文化の核として発展する、蹴球都市『藤枝』と東大LBとの出会いは1958年（昭和33年）、天皇杯第38回大会であります。地元志太クラブは2回戦で前年の覇者中大クラブを破りながら、準決勝で敗退しました。大会最終日、会場である藤枝東高は1万人を超す大観衆で埋まり、3位決定戦の東大LB戦、志太クラブは地元の声援を受け、前半を2－2で終えながら、後半PKによる失点、更にダメ押し点を奪われて2－4のスコアーで試合は終了、東大LBが3位の座を確保されました。

藤枝フットボールクラブはベルリンオリンピックで活躍された笹野積次先輩が中心となって、『ベルリンの奇跡』から40年後の1976年（昭和51年）に設立されました。

クラブ創設30年の2006年、我がクラブ会員の金丸 仁（東大医学部卒、藤枝総合病院長）が東大LBとの交流を提言してくれました。藤枝総合公園サッカー場に東大LBメンバーが集結され、第1回の交流親善試合が開催されたのは秋晴れの11月11日（土）でした。

その後も毎年、天然芝が映えるサッカー場での定期戦、そして試合後の懇親会は両クラブ員の親密度を深めていきました。2009年11月、東大のホームカミングデイのイベントに招待されて、御殿下サッカー場で交流試合と懇親会をする機会を与えて戴きました。2010年には日本サッカー協会の重鎮、岡野俊一郎氏を交えての感動の1日となりました。2012年、東大LBとの交流7周年記念イベントを藤枝総合公園サッカー場で北村藤枝市長、元日本代表の杉山隆一、富沢清司、中村一義なども参加して盛大に開催され、東大LB浅見理事長の素晴らしい挨拶を戴きました。2013年開始の藤枝シニア草サッカー大会、記念すべき第1回大会に東大LBは見事優勝を飾りました。その後も毎年9月、同大会に参加されております。2015年、東大LBとの懸け橋役として活躍していた金丸 仁氏が余命1年という悲しい知らせを仲間に告げ、東大LBと藤枝FCの為に金丸杯を寄贈されました。記念大会後の懇親会、金丸杯に注いだビールを美味しそうに飲む彼の姿を仲間は深く脳裏に刻んだことでしょう。

藤枝フットボールクラブは2016年、創立40周年を迎え、記念大会と記念誌を発行することができました。クラブ基本理念を共有して、各カテゴリー（40・50・60・70）別のスタッフがクラブ員をまとめ、年度事業（公式大会・交流事業）に臨んでおります。

静岡県シニアリーグに於いては3冠達成（2013年40･50･60）、40代は2008年から9回の優勝、準優勝1回の無敵の強さを誇っております。50代60代70代もここ数年、優勝を含め優秀の成績を残すことができました。県内制覇の延長線上にある全国シニア大会に出場、40代は2016年全国3位、2017年には全国準優勝に輝きました。そして本年、2018年は40代と60代が全国制覇に挑戦しました。40代は東海予選敗退、60代の福島相馬大会、予選ラウンド対埼玉県選抜に逆転負けの結果でした。ねんりんピック大会は出場した熊本、宮城仙台、栃木、秋田大会で無敗の戦績を残しております。

藤枝フットボール（会員117名）が日本有数のシニアクラブを目指すという、高い目標を掲げるまでに成長できたのは東大LBさんとの交流が基盤になっていると感謝しています。「意志ある継続は力」更なる飛躍発展に努めます。

巻頭座談会

次の100年へのキックオフ

本誌編集委員長　武田　厚
浅見俊雄
利重孝夫
俣野泰佑

1918 年の創部から 100 周年を迎えたア式蹴球部。日本代表や日本サッカー協会会長など、これまで選手やマネジメント人材を数多く育て輩出してきた。今までの日本サッカーの発展に重要な役割を果たしてきたが、これからの 100 年はどうなっていくのだろうか。各世代の４人の ＯＢ が集まり、ア式蹴球部の未来を語ってもらった。すでに次の時代へのキックオフは始まっている。

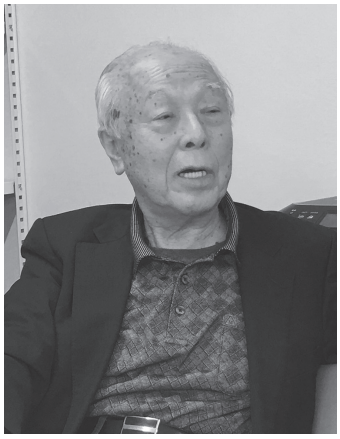
武田　東大ア式蹴球部は、今年創部100年を迎えました。この記念すべき年を迎えるに当たり、３年ほど前に創部100年の記念誌を作ることを、ＬＢ会の理事会で決めました。そして、90年誌を発刊してからまだ10年しか経っていない中で100年誌を作るとなると、どんな内容にするのか……様々な議論がありました。しかし、考えてみるとこの10年間に、ア式蹴球部とＬＢ会の将来を示唆するようなことが多々あったのです。これらを標語的にまとめると「生涯サッカー（老若男女）」であったり、「国際交流」であったり、「女子サッカー」、そして「地域との連携」などです。

90 年誌では、ア式蹴球部の過去の栄光と歴史を整理しました。100 年誌のこの座談会では、直近 10 年間の動きを踏まえて、「これからのア式蹴球部はどうあるべきか」を主軸にして皆さんのお考えをうかがっていきたいと思います。

まずは、戦後、東大が関東リーグ１部で活躍していたころのことから、浅見さんにお聞きしたいと思います。



武田　厚
1970年法学部卒、新日鉄入社。1976～77年東大監督。2013年～なでしこリーグ理事。2017年～東大LB会理事長。



浅見俊雄
1956年教育学部卒。元東大教授。JFA審判委員長、AFC審判委員を歴任。2010年殿堂入り。1968～75年東大監督。2016年まで東大LB会理事長。

歴史に残る
入れ替え戦の激闘

浅見　僕は昭和31年卒ですが、東大サッカーが強いと思って入部したのですが、全然違っていたんですよ（笑）。本当に上手いのは岡野俊一郎さ

んくらい。旧制高校の人は頑張るけど、そんなに技術はないと僕は感じていました。

１年生の時に初めて最下位になり入れ替え戦に出場したのですが、１年でレギュラーは僕ともう一人だけ。当時、医学部側の道路から入ったところの地下に部室があったのですが、そこから二人で上にあがっていく時に「俺たちが頑張らないと先輩皆がガタガタになっているぞ」って会話したのを、今でも覚えています。ア式にとって初めての入れ替え戦です。それまでは自動入れ替えだったんですが、その年から入れ替え戦が導入されました。青学が対戦相手だったんだけど全く負ける気はしなかったですね。開始 10 分で１点目、そのあと僕が決めて ２－０ になったら皆落ち着きました。ハーフタイムで階段降りて部室に入ってから「これは大丈夫だな」と。実際に勝利して降格は免れました。それが最初の入れ替え戦ですよ。その後も何度か入れ替え戦を経験しましたが、暫くは１部に留まっていました。



利重孝夫
昭和63年卒。東大ア式蹴球部総監督。現役時代はア式初のクラブユース出身者として活躍。現在もサッカービジネスに従事している。



俣野泰佑
平成30年卒部。学生GM・東京都大学サッカー連盟幹事長を務めた。部の運営を通じて大学スポーツ全体に関心をもち、活動した。引退後は在学中ながらスポーツマーケティングに携わっている。

武田　でも現実的にはじわじわと戦力的な面で劣化していたのですね、その頃から。

浅見　僕らの学年では中島というエースがいましたから。日本代表に呼ばれるくらいの選手です。でも、代表合宿には呼ばれたけど行かなかったですね。

武田　その後関東リーグ２部に落ちてからは、1959年と62年に、１部との入れ替え戦を戦っています。だから、当時はまだ１部と２部の端境にいたんです。

浅見　まさに１部と２部のあいだという感じでしたね。

武田　ところが1960年代に入ってからは２部でもなかなか勝てなくなった。そして、69年に、７年ぶりに２部で優勝して１部との入れ替え戦に出ます。私が４年生の時だったのですが、関東リーグ１部との入れ替え戦は、この試合が最後となりました。関東リーグ１部と２部の端境期の最後だったのではないかと。ちょうど創部50年の頃になるんですよね。

それ以降は、関東リーグ２部でも、むしろ下位グループをウロウロしていました。1972 年には今度は下の入れ替え戦に出ています。この時は明学大に勝って２部に残留できましたが。そして、1977 年も下の入れ替え戦で立正大に負けて東京都リーグに落ちてしまいます。

浅見　私の役割は、何とか2部に留めさせたこと(笑)。

武田　そこで私は、浅見さんから「次はお前やれ！」と監督に任命されて、その後2年目で東京都リーグに落ちたわけです。私がお勤めを果たせなかったということですが……。印象に残っているのは当時の練習試合や入れ替え戦がそうだったのですが、自分が現役の時には想像もしなかった大学が上がってきたのです。

浅見　そうでしたね。どんどん新しい大学が上がってくる。無理なんです。今の体制で東大が上のリーグへいくのは。

武田　自分が現役の時、練習試合で国士舘大学に行ったんです。その時は１、２年生だけのメンバーで試合をしました。国士舘のほうが、東大と試合をやれることをありがたがっていました。そんな時代だったんです。

私が監督の時に、関東リーグ２部で、下の入れ替え戦をやりました。相手は、立正大学でした。

正直なところ、サッカーに関してはそれまで聞いたこともなかった……。しかも結局負けちゃったわけです。そしてその後、東京都リーグに落ちてからも、悪戦苦闘しています。

昔の栄光を どうやったら取り戻せるのか

浅見　当時、横目で野球の六大学を見ていたら、仕組みがよく出来ていて降格がない。ずっと落ちないでやれるから羨ましいっていうのもありましたが、逆にかわいそうな気もしました。

利重　我々の時代はラグビーもそうでした。対抗戦があっても落ちなかったですね。

浅見　そもそもリーグ戦自体の形式が違いますからね。

武田　そこから東京都リーグでの悪戦苦闘が続きます。今日に至る40年間に何度も都リーグで勝ったり負けたりを繰り返しています。

利重　私の時代には東大史上初のリーグ昇格というのがありましたね。都リーグ2部から1部への昇格です。

浅見　私の頃は関東リーグ1部にもうちょっとで届くことが2度くらいありました。その２度目は中央大学との入れ替え戦でした。現役の俣野さんの世代は、残念ながら厳しい状態ですね。

俣野　そうですね、申し訳ありませんが。2011年に都リーグ1部で優勝しましたが、そこからは東京都1部リーグの下位がずっと続き、最近は2部と1部を行き来してというのが現状で、昨年は2部リーグでも苦戦しました。

今の時代、 サッカーの初心者はいない

浅見　現在の日本サッカーの高校生レベルの実情と東大の入試の現状を考えれば、よくやっているとしか言えない。ここから頑張ってもう一つ上へと言うのは、よっぽど別の要素がないと難しいでしょうね。

武田　私たちの時代は大学でサッカーを始めて、そこから鍛えられて、4年生になってレギュラーを獲得するという構造はまだ残っていました。それくらいサッカーが普及していなかったともいえます。利重さんの頃はもうほぼ全員が経験者でしたか？

利重　そうですね。未経験で初めてボールを蹴る人はまず入ってこなかったですし、入ってきても続かなかったですね。

浅見　まだ我々の頃は大学に入ってサッカーを始めてもレギュラーになった人はいましたからね。

利重　大学に入って始めるスポーツとしてはアメフトやラクロスがありました。私の時代はアメフト全盛期でしたから、サッカー経験者もアメフトにかなり流れました。

俣野　今時入学して初めての人はいないですね。サッカーをやっている者でさえLBのセカンドチームの場合もあります。Cチームだとスタッフを選択する者もいます。僕もそうなのですが。

御殿下サッカースクールの 評価

武田　成績という観点から振り返ると、どちらかというと右肩下がりでずっときているという事実がありますが、もう一つ別の軸で見てみると、地域との繋がりが強化されています。地域連携という観点で見たら、関東1部で活躍していた頃は東大自体が地域を遮断していた側面があります。“聖地”だという雰囲気で長年きていたわけです。

地域連携という点で最も象徴的なのは、やはり御殿下サッカースクールです。これは我々が活動を継続してきていて、その流れのなかで象徴的ですが「LB-BRB TOKYO」があります。地域連携を意識的にやってきた流れがあったから生まれたチームです。このあたりはサッカースクールを創設した先見の明は素晴らしいと思います。当時、浅見さんがスクール創設に突き動かされたのはどんな理由からだったのでしょうか。

浅見　一番は、当時ドイツやロシアを訪れた経験です。外国の状況を見ると、地域密着じゃないクラブなんてあり得ませんでした。さらに、日本の大学サッカーは全く地域とは関係なくOBがサポートしている仕組みであり、地域の絆が何も生まれていない。

そんなおりに東大紛争が起きました。彼らはずいぶんひどいことも突きつけてきたけれど、“大学って何ぞや？”ということを問うてきた。地域の中の大学とはどのようなものかという問いから、サッカー部で地域と何が連携できるかを真剣に考えるようになったのです。その頃です。90 年誌でも大変ご尽力頂いたサッカージャーナリストの牛木素吉郎さんが「東京サッカー友の会」をつく

って、僕にサッカーの指導をしてくれと依頼があった。指導については学生からも突き付けられた。

そしてもう一つは、このあたりの小学校や中学校の校庭は全部アスファルトで固められていて、サッカーなんかできないんです。御殿下は当時は土のグラウンドでしたが、その御殿下をフルに使って子供たちにサッカーに関心を持ってもらう機会をつくっていこうと。これが動機でしたね。たまたま戸苅、菊池、その後に兵頭が仲間に入ってくれた。近所の学校を回って子供たちに声を掛けていった。女子にもね。

武田　日本サッカー協会(JFA）が子供たちにサッカーを普及させようと動き出す以前に取り組んでいたのですね。大変貴重なお話です。実は私は当時4年生で、最初のコーチ役を務めました。でも、浅見さんの理想や背景は全く知らなくて、ただ「日曜の朝に来て子供たちと遊べ」と言われて引き受けました。日曜の朝に早起きして行くのは辛いわけですが、500円もらえて、しかも鍋焼きうどんが食べられる。これにつられてやりました(笑)。3、4人でローテーションを組んで毎週回していきました。

浅見　その甲斐あって子供たちもだんだん増えていきましたね。

武田　私なんかこの流れが一つの原点となって、会社に入ってからも、サッカー部の運営に携わりながら、地域の子供たちを集めて、少年サッカースクールを作ったりしました。勤務地が変わるたびに御殿下のパターンを実行していきました。まさに雛型は御殿下でした。

俣野　御殿下の指導は、サッカーを教えるというよりも自由に楽しむがモットーになっています。当時からでしょうか。

浅見　そう。とにかく都会の中じゃない環境が御殿下にはあって、その中で遊んでもらって、ボールも蹴ってもらって。

武田　まず、子供同士の触れ合いが中心でしたね。まるで家族みたいな感じでした。都会の真ん中で子供たちがグループになって一緒に同じことをする。この経験はかけがえのないものです。ただ、今もずっと続いていることが驚異です。そして、２年前に利重さんが受け継ぐ形でもう一度サッカー部の活動に引き戻した。昔と同じような雰囲気でやっているのですか。

利重　そうですね。それまでは兵頭先生が中心となって、地域のお父さん方の助けを借りながら長い間スクールが続けられてきました。


御殿下サッカースクール

兵頭先生がそろそろ次の世代へバトンタッチをと思われたタイミングで、地域の大切な資産であるスクールを絶やしてはいけないとの思いもあり、引き継がせてもらうことになりました。

学生の学びの場としても非常に貴重ですし、地域の子供たちにとっても大事なコミュニティです。学生が部活に時間を費やすということは、その分社会との関わりが薄くなるマイナス面を孕んでいますが、ア式にいながら社会との接点を持つ機会を作るという視点で運営体制も学生中心に変えました。現在は学生が主体的に企画をあげ、実際にコーチも行っています。

武田　主体的に学生がやっている？

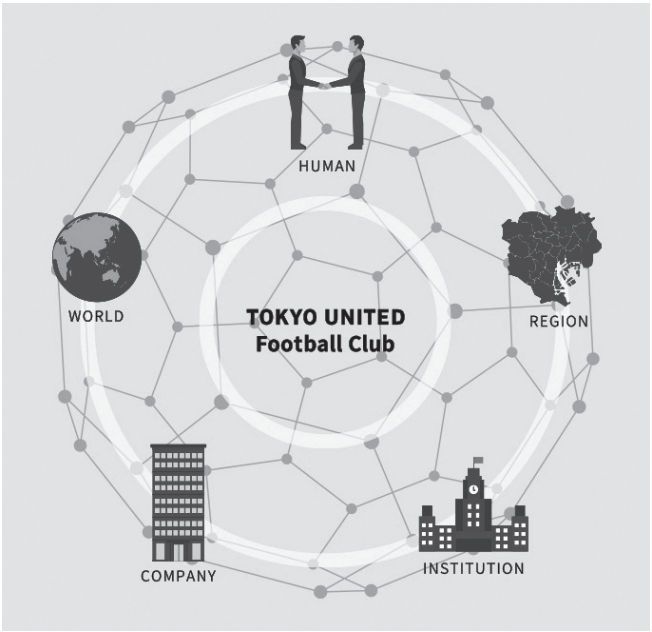
利重　そうなんです。親御さんとのコンタクトも基本的に学生が取るようにしています。そこに学びがあります。何かあった時は私が出ていきますが、可能な限り学生が主体で子供たちをどう楽しませるかを考えてやっていますね。

武田　もはやサッカー部の立派な財産ですし、何事も始まりは子供たちが原点ですよね。今後も大切にしていきたいです。

俣野　はい。今のお話を聞いて、そういった気持ちが強くなりました。

これからの100年を象徴する「東京ユナイテッドFC」

武田　地域との関わりという観点ではもう１つ。東京ユナイテッドＦＣと文京ＬＢレディースを傘下に持つ「LB-BRB TOKYO」の誕生です。このクラブの設立経緯や直近の動向などについては、福田監督が詳しく述べています。とくに文京ＬＢレディースは、まさにア式蹴球部と文京区との連携の象



東京ユナイテッドFCのHPより。「サッカーを通じて、人をつくり、社会をつくり、未来をつくる」という理念を実現するためのビジョンとして「国際社会をリードする人材の育成」「新しいサッカークラブのモデルをつくる」「健康都市TOKYOをつくる」が、そしてそれへのアプローチして「人をつなぐ」「地域をつなぐ」「学校をつなぐ」「企業をつなぐ」「世界をつなぐ」と謳われている。

徴的なものといえるし、そのおかげで東大女子サッカーの活動も一段と充実したといえます。

視点を変えると、残念ではありますが現役の戦力と成績は右肩下がりですが、地域連携という点ではグンとこの10年間で跳ね上がっています。これは非常に象徴的なことではあると思うんですよ。このあたりの関係を知らない方も多く、そういった意味でもこの「100年誌」は多くのOBに目を通してもらいたいのです。

浅見　すでにトップチームはありますからね。しかも地域のチームとして活動している。

武田　これからの100年、つまり我々の将来を語る上で一つの大きな象徴的なチームです。

武田　地域交流が進むのと同時に、この10年間は国際交流も盛んになっています。昔は現役の時に南ベトナムの留学生と試合した記憶がありますね。

浅見　交流そのものは戦前からあったでしょうね。日本の1部チームと同じくらいの実力を持ったチームが続々と来日してくる。向こうは勝てるから嬉しいんですよ。試合が終わると食堂で食事して缶ビールを飲んで。しかも東大には1−0や2−0とかで勝つから、嬉しくなっちゃう。他の大学に聞くと、東大へは次々とやって来たみたいです。英語が通じますからね。

武田　しかし、その頃は定期的に開催するという制度はなかったと思います。

利重　2015年秋にタイの東大といわれているチュラロンコーン大学に学生を連れて行って、サッカーだけでない交流も行いました。我々は勝てるだろうと思って行ったら…すごく強くて。しかも自前の立派なスタジアムがあってビックリでしたね。

浅見　大学スポーツといっても桁が違います。

利重　タイの体制は実は日本よりも先を行っています。大学が持つインフラを基盤としたプロチームがあって、チュラロンコーンの学生を含むその3軍チームが当日の対戦相手でした。セカンドチームには日本人プロ選手もいましたね。2万人は収容できる立派なスタジアムが大学、つまりバンコクの中心地にありました。チュラロンコーンには学業、スポーツなどあらゆる分野の優れた学生がいるので、サッカーに関しても世代別の代表選手などが入学しています。ただ、残念ながら懇親会はあまり盛り上がらなかったですね。サッカーの選抜選手たちなので、英語は全くダメでしたから。

武田　タイは国立大学でありながらプロチームを持っている。この制度は日本人の感覚からすると信じられない。タイでは当たり前のようだけど。

浅見　東京ユナイテッドFCとLBの将来の参考になればいいですね。

武田　タイは、日本との関係は良好だし、産業界のつながりも太いですから、現役の諸君は「社会を知る」という意味でも良かったと思います。も

し、再度タイ遠征をするならば、サッカーの試合は勿論ですが、現地の日本企業の活躍ぶりを見聞する機会を持ちたいですね。

現役とOBとの交流の実現

武田　現役とOBの交流という観点で話し合ってみたいです。浅見さんの時も先輩にあたるOBはいたわけですよね。

浅見　就職活動のこともあるから、会社まで行って昼飯をご馳走になったり、面談の割り振りをしてもらったり、今と変わらないと思いますよ。でも、僕らの時代は結構厳しい時代で、東大卒だからどこでも行けるという状況ではなかった。昭和30年の頃の不況の時でしたね。

武田　先輩たちとサッカーをやるとか、そういった交流は？

浅見　なかったですね。たまにOBが所属しているチームと試合はしましたが。

武田　私の時はちょっと特別だったんですかね。御殿下クラブという関東リーグに入っていたチームがあり、1956年と59年に2 部リーグで優勝したメンバーでつくった社会人チームでした。その人たちが週末に必ず練習に来るんです。技術を教えてもらったり、練習試合をやったりしました。7年違いの先輩など今でも親しくさせて頂いています。そういう交流があったのです。

浅見　僕は仕事で名古屋から東京に戻ってきた時、1967年くらいです。その時に「浅見さんも一緒にやりましょう」と言われて入ったのですが、みんな練習しないんです。それで「関東リーグに入るって言うけど本当に関東でやるつもりか？　やるなら週に2回練習しなきゃダメだ！」と言った。そしたらみんな練習をやるようになった。

武田　まるでユナイテッドの先駆けみたいなチームが当時はあったんです。ところが、77年に僕が監督をやっていた頃にはもう御殿下クラブはなくなっていました。そうなると卒業したOBは、皆さん会社のチームに所属して大学には戻ってこなくなりました。

浅見　結局、関東リーグのレベルまでは届きましたが、実力的にリーグではベタ負けだったんです。練習環境がなくて練習をやっていませんから。

武田　OBと現役との交流という意味では、御殿下クラブがなくなった後ほとんど絶えたのではないでしょうか。どうでしょうか。

利重　私の現役時代は4年間、ずっと工事のために御殿下グラウンドを使用することが全くできませんでした。当時は広さの問題などで公式戦もできないような農学部のグラウンドしか練習するところがなかったので、OBの方々の活動もあまり記憶にないですね。

武田　やはり部室やクラブハウス、グラウンドというベースになる場所がないと、現役とOBの活動は活発にならないです。

利重　その後、平成初期卒業世代が中心となって結成したDiegoというチームが活動を続けていて、ア式現役の監督をしていた胡内くんや現監督の福田くんがそのDiegoを上手く引き継ぐ形で2013年にア式若手OBチーム「東大LB」を再結成させています。現在は、若手OBと現役スタッフ陣合同の「東大LB」「東大LBセカンド」2チーム体制で東京都社会人リーグを戦っていますね。一方、ミドル世代には残念ながら東大OBが核となったチームはなく、異なるクラブで個別にサッカーを続けている状況ですね。

武田　お陰様でシニア世代はシニアチームとして活発にやっています。そう考えると、サッカースクールの子供たちから始まってシニア世代まで活動している。

利重　ユナイテッドが今年からジュニアユースチームを文京区を本拠とするソレイユさんと合同で発足させました。

武田　こういった動きが、90年誌を出した後の10年間にウワッと起きた。本当に凄い展開ですよ。

浅見　僕は基本的には知りませんでしたね。今みなさんの話を聞いて初めて知ったところもあります。この座談会の意味や意義を感じますね。

これからの100年へのキックオフはすでに始まっている

武田　100年誌の巻頭座談会も締めに入って行きますが、今まで話し合った観点を整理すると、いくつかの方向性が見えてきました。

　確かに戦力という問題もありますが、まず東大と地域との連携、現役とOBの接点や交流の拡大、シニアの活発な活動、LB-BRB TOKYOや東京ユナイテッドの挑戦、女子サッカーの活動の活発化などです。これからの東大サッカー部とLB会の活動の大きな柱になるものばかりで、しかもすで

に始まっています。

こういった新しい動きはＬＢ会が法人化されてから起こり、現役との接点も従来より非常に厚くなった印象があります。現役世代はどういった思いがありますか。

俣野　昨年、新体制になって武田さんが理事長に、吉江さんが事務局長に、和田さんが事務局次長になられてから、ＯＢの方々がグラウンドに来て下さる回数が増えています。練習においても、ＯＢの皆様との関わりをすごく感じています。新しい部室、グラウンド、法人格、これらを持っているからこそ可能なことがすごく増えてきているのではないでしょうか。法人としてのＬＢ会がア式蹴球部の支えになって下さっているのはすごく安心感がありますし、まさにこれからの100年の土台になると思います。

武田　あと、大学との関係といえば、昔からサッカー部は非常に良い関係であったと思います。その辺は今も変わらずそうであるし、今後も継続していって欲しい。

浅見　東大の学生課長の横山陽三さんがサッカー部をつくったんですよ。職員がメンバーの「チーム・ダックス」をね。その影響があります。

武田　我々の時代もダックスとよく試合をやりましたね。

利重　ＯＢチームがなかったので、自分の周りの世代でもダックスに入るOBがいました。

武田　当時は、あまり大層な要求をしたわけではありませんでしたけど、大学側は、きめ細かく希望を聞いてくれたし、相談できました。本郷には野球部とサッカー部しかなかった時代でしたから、御殿下グラウンドはサッカー部専用のような状態でしたね。

俣野　今も御殿下サッカーグラウンドの半分くらいは使わせて頂いています。半分以上はア式蹴球部の割り当てなので、これは大きな資産です。普段は何気なくＡチーム、Ｂチームと割り振っていますが、相当いい環境だと思っています。御殿下サッカースクールの運営などをみても、ＬＢ会が法人格を持っていることは、大学との関係を考えると、すごく良いと思います。

武田　新部室の建設のプロセスの中で、現場と密着せざるを得なかったのですが、そういった面でも関係の積み重ねや信頼感が良い面で働いた。そういう点では、今の地域との連携を含めてサッカー部の大学内での評価は非常に高いものがある。ただ、これからは我々の中身が問われる。これは間違いありません。何を目指していくのか、どう実現していくのか。それによってはさらに大学とのやり取りが高いレベルでできる。その可能性を大事にしていきたい。

浅見　JFAとの関係はどうなっているのですか。

利重　去年、協定を結んで提携発表しましたが、中身的にはこれからですね。

浅見　少しずつでもいいから動いていって欲しい。両者の提携は本当に素晴らしいと思うので、なるべく早い段階で具体的なテーマを持って動かして欲しいですね。

武田　先日、総長室の杉山さんとお会いした時に、「御殿下ルネッサンス・プロジェクト」の話になりました。彼の持論でもあるのですが、「御殿下の再活用」、要するに付加価値を付けてもっとアピールすべきだと。このプロジェクトは、御殿下の運営・管理をＬＢ会が大学から受託して、グラウンドにクラブハウスを作り、スタンドを設ける……というものでした。2020年にはもう間に合いませんが、サッカーは国際試合が頻繁にあるので、いろいろな形で御殿下グラウンドを協会に使ってもらう。そういう可能性だってあるんじゃないかと…。

浅見　今、検見川はどうなっているのですか？あそこは横山さんが必死になって頑張ったんです。サッカー部が最優先で使えるようにね。

武田　検見川はもう…、グラウンドも宿泊施設も昔と全く違います。芝もひどい状態です。現役は合宿には使っていますが。

俣野　その通りです。ピッチが三面あって場所的には広いですが、管理が大変だと思います。

武田　話を戻しますと、そういう点では協会との連携の一つには、「御殿下の再活用」があると思っています。

地域に根差した大学を実現するため、サッカー部がその先鋒隊になれればと。そういった自覚を持って我々ＬＢ会も取り組むし、それを現役が下支えする関係がベストだと思うんです。協会との連携というのも、そこを上手く使って実現できないかと。

俣野　自分自身も地域との関わりの中で活動させていただいていて思うことですが、お金の面なども含めてもっともっと地域と連携したり、企業の

人と連携したりとか、そういったことが活きてくると考えています。グラウンド利用も一般開放するだけではなく、お金集めとか協力へのお願いなども、もっとアウトソーシングできるんじゃないかと思います。

武田　もっと夢を持ちたいですよね。将来もっとこうしたいとか。現役もOBもね。

利重　おっしゃる通りです。夢というか東大のア式蹴球部の存在意義というか、本当は大学チャンピオンを目指すと言いたいところですが、強さ以外でもいろんな日本一があるのではないかと思います。

例えば今年も都学連の幹事長は東大生でして、これで４代続けて幹事長を輩出したことになります。

創部５年目の女子部も去年は関東学連の幹事長を東大から出していますし、学生スポーツの連盟活動のリーダーシップを取っていくことも東大として継続していくべきでしょう。

俣野　先日の日経新聞に井上という2年生のことが、分析のところで取り上げられていました。東大がしっかり運営しながら頭脳を活かしていたと取り上げられていました。そういう点では各現役生は活躍しているんじゃないかと思います。

武田　いろんな形でサッカーに関わっていく人材を輩出していくのもいいですね。スタッフや運営面のマネジメント、将来のビジネスなど。そういった意味でスタッフの力というものはたいしたものです。これを一つの勢力として認知して、その延長線上で協会との連携を進めていく。スタッフが関わっていくことで協会との接点も高まっていく。

浅見　そういった生き方も少し考えてもらえたらいいですね。協会の仕事が面白いと思ったら、卒業後に就職すればいい。

利重　日本代表の監督だって、また東大から出したいです。なかなか選手として実績を残した人でないとJ1や代表監督になることは難しい環境ですが、欧州では選手として成功する人と監督として大成する人は必ずしも一致しないことはモウリーニョ（マンU）やレーヴ（ドイツ代表）、最近増えてきたブンデスリーガで成功を収める若い監督などの例を見れば明らかです。いずれまた岡野さん以来の日本を代表する監督を輩出することが出来ればなと思っています。

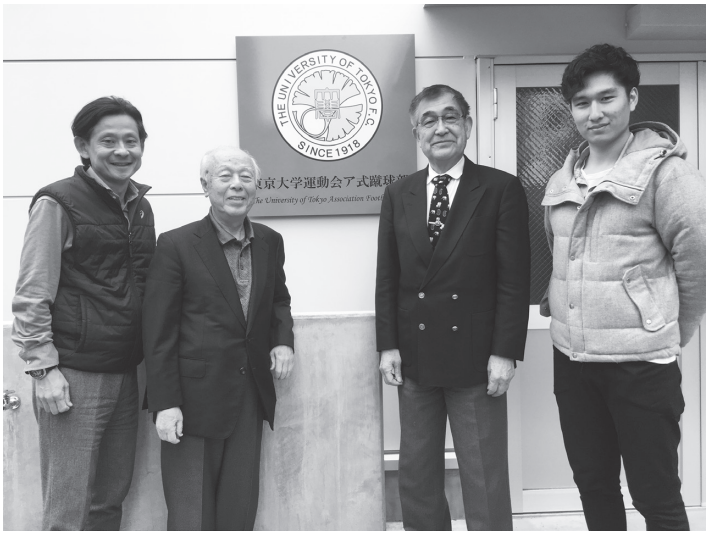
武田　世界にも通じます。サッカーだからできることでも他競技にはできない場合もあり得る。

利重　選手や監督以外でも、弁護士、会計士、心理学から栄養学、そしてチームマネジメント、スポンサーなどあらゆる面で日本のサッカー文化を盛り上げ、貢献できる人材をア式から送り出していきたいですね。

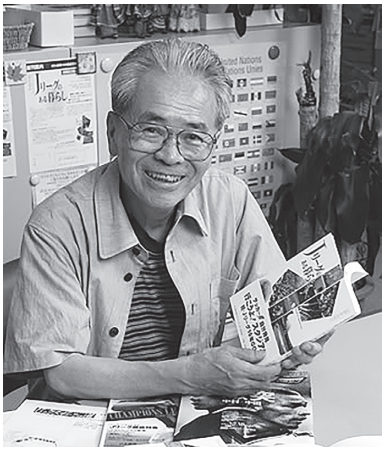
浅見　これからの100年は、スポーツ界への人材の供給という点からも、卒業した人がいろんな形でサッカーに関わっていけたらいいですね。

2018年3月19日、東大ア式蹴球部部室にて

構成：上野直彦



部室の正面玄関前にて。



巻頭インタビュー１

サッカーを広めたい！ ペンにこめた 熱い思い

牛木素吉郎（昭和 31 年卒）

新聞記者として意欲的にサッカーを紹介して普及に努め、また雑誌や書籍を通して日本のサッカー界に提言を行った。2011 年にはその功績が称えられ、日本サッカー殿堂掲額者に選出された。半世紀以上にわたりサッカー・ジャーナリストとして活躍した牛木素吉郎に聞いた。

サッカーとの出会い

――ア式蹴球部に入ろうと思われたきっかけをお聞かせください。

ぼくは県立新潟高校を卒業して、まず新潟大学に入りました。東京の大学はとても入れないと思ったんです。でもやはり東京へ行きたくて、１年後に東大を受けました。一般の下宿はお金がかかるので、費用が安い駒場寮へ入りました。当時の駒場寮はサッカー部の部屋、野球部の部屋と、部屋が部ごとに分かれていたんです。文化系の部の部屋もありました。サッカー部の部屋に、地元でいっしょにサッカーをやって１年先に東大へ入った同級生がいたので、サッカー部に入ることにしました。あいつがやれるんだったら自分もやれるだろうと思ってね（笑）。

――サッカーの心得がおありだったのですね。

当時、戦後すぐのころ、新潟ではサッカーはあまり知られていなかった。ぼく自身も中学まではサッカーを知りませんでしたよ。

初めてボールを蹴ったのは、中学３年のときでした。花井進さんという人が中国の青島から引き揚げてきて、クラスに編入しました。当時の青島は国際都市でしたから、彼はサッカーにも存分に触れていたのでしょう。教室の黒板に図を書いたりしてぼくたちにサッカーを教えてくれました。そして花井君の指導でサッカーを始めました。ボールは学校にあったんですよ。革は貴重でしたから配給品として学校に配られていたんです。グラウンドは野球と陸上が押さえていたので、その隙間を使って練習しました。当時、伊藤豊さんという人が満州から引き揚げてきて柏崎に教員として赴任して、そこでサッカーの指導を始めていた。あちらのグラウンドへ行って試合をやったりしましたよ。

当時、新潟ではサッカーがまったく行われていなかったわけではなくて、旧制高校などでは戦前から試合もやっていたようです。彼らは卒業すると東大や東北大に行ってしまう。だから地元にサッカーが根づかなかったんです。

――東大に入られたのが 1952 年。当時の東大ア式蹴球部は強かったですよね。

同級生に浅見俊雄、それから１年上、いや実際には２年上なんですけど岡野俊一郎がいた。3年のときは学連の委員、4年生のときにグランドマネージャーとして仕事をしました。当時東大は全国大会で優勝したりして強かった。旧制高校から優秀な選手が入ってきたんですね。

日本でサッカーを広めたい

――新聞社に入ろうと思われたきっかけは？

ぼくは高校生のころから新聞記者になろうと思っていました。文章を書く仕事がしたかったんです。文章を書いてお金になる仕事はなんだ、新聞

記者だろうと。

当時東大は理Ⅰ、理Ⅱ、文Ⅰ、文Ⅱとあって、ぼくは入りやすそうな文Ⅱに入りました。文Ⅱは文学部へ進学するコースです。社会学科に進んで、当時の新聞研究所にいらっしゃった日高六郎先生などの教えを受けました。文Ⅱは雰囲気がよくてね。いい仲間もできた。だけど、文Ⅱに入ると就職はないぞと言われていた。実際、東大だということで文学部でも採用してくれる企業が出てくるのは、ぼくが卒業して２～３年たってからでした。でもね、新聞社は文学部の学生でも入社試験を受けさせてくれたんです。ただし、東大といえども入社試験での優遇はしない、試験の成績がよければ入れてやるぞ、と。

―― 1956 年に東京新聞へ入られました。

結局、読売新聞は落ちて、東京新聞に入りました。サッカーをやっていたのだからと、配属は運動部でした。東京新聞は、都新聞と国民新聞が戦争中に合併してできました。入社する人も少なかった。当時は占領軍の指示で、新聞社はそれぞれ朝刊または夕刊のどちらかしか出せなかったんです。朝日や読売は朝刊で、東京新聞は夕刊でした。ところが東京新聞も朝刊が出せることになって、20 人の予定だった運動部の採用が 40 人になった。全国紙に入ると、みんな地方へ配属されるけど、ぼくは東京でした。

記事をよく書いたのはプロ野球、それからオリンピックやアマチュアスポーツでした。当時御茶の水にあった日本体育協会の記者クラブにも所属しました。東京新聞に２～３年ほどいて、読売新聞に移りました。読売新聞がスポーツ面を拡張することになって、引き抜かれたんです（笑）。読売へ移ってからは海外にもよく出された。南米やヨーロッパで、スポーツ関係を何でも取材しましたよ。

ぼくはね、サッカーを広めたいという気持ちを強くもって、サッカーの記事を一生懸命書いた。「海外ではサッカーというスポーツがたいへんさかんで、広く楽しまれていて、こんなところが見所で」という紹介をさかんに書きました。新聞社では記者が書いた原稿を整理部の人が見て採否や扱いを決める。だからぼくは、整理部が採用してくれるように記事を書いた。当時は新聞の記事といえばかたい調子だったんだけど、ぼくは話し言葉に近い、やさしくて読みやすい文章で書いた。

――わが国初のワールドカップ解説書を書かれましたね。

ワールドカップについては、紹介記事を新聞に書いたのもぼくが初めてでしょう。1958 年のことでした。海外のサッカーに関する情報なんか、まだほとんどどこにもない時代です。本のほうは、1970 年のメキシコ大会を取材して書きました（**写真１**）。

これがその時の写真です（**写真２**）。それとこれが、開幕試合を見にエスタディオ・アステカと



写真１『サッカー世界のプレー 1970メキシコ大会』牛木素吉郎（構成）・岸本健（写真）、1970年、講談社。

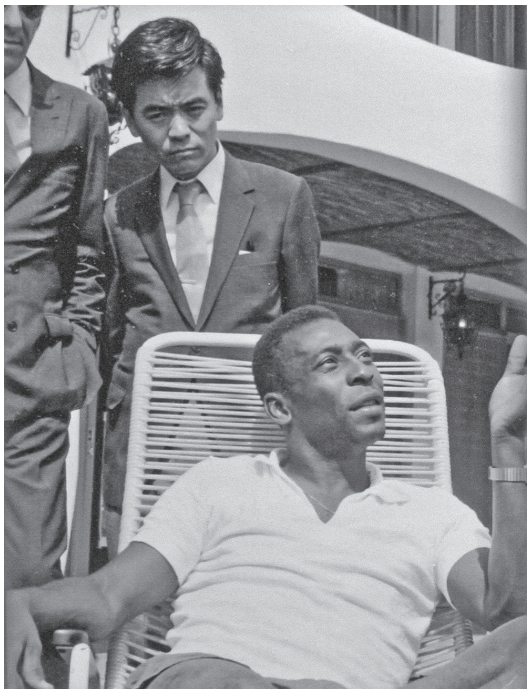


写真２　1970年、ワールドカップ・メキシコ大会会場にて。座っているのはペレ。（撮影：岸本健）



写真３　1970年、ワールドカップ・メキシコ大会会場にて。前列左から2番目が牛木。（撮影：岸本健）

いうスタジアムに日本から足を運んだ関係者が集まったときの写真です（**写真３**）。いずれもフォトグラファーの岸本健さんが撮ってくれました。前列左から、日本テレビの笹浪昭平さん、その次がぼく、そして当時『サッカーマガジン』の編集長だった堀内さん、そしてのちに日本サッカー協会の会長になる藤田さん、共同通信の鈴木さん、後ろへいって、左から長沼健さん、日刊スポーツの谷口さん、そして竹腰さん、当時日本サッカー協会会長だった野津さん、大阪朝日の大谷さん。このときぼくは新聞にも特派員として原稿を書いたんだけど、現地へは自費で行った。その持ち出し分をどうにかしましょうと、講談社が本を出すことにしてくれました。あのとき記者として行った人はみんな自費だったんじゃないでしょうか。正式に会社から派遣されたのは朝日だけ。

メキシコでワールドカップを目の当たりにして、ぼくはこれを日本でもやりたいと思いましたよ。現地で、野津さんが国際サッカー連盟の当時の会長だったスタンリー・ラウスさんに、ぜひ日本でもワールドカップをやれと言われた。野津さんは最初からやりたい派。野津さんはできそうもないことをできると言うんです（笑）。でも竹腰さんは、慎重でした。確かにグラウンドやスタジアムがないし、だいたいお客さんが来ないでしょう。おまけに日本のチームは弱い。だけど、来年とか再来年の話ではなくて、十何年後の話です。ぼくは、いまできなくても、いつかやろうじゃないかと思いましたよ。サッカーをさかんにするとか、日本チームを強くしたりするのが日本サッカー協会の仕事じゃないか、日本でもだいぶサッカー人口が増えてきていたころなのに、弱気で夢がないじゃないかと。当時日本サッカー協会では、事務方にいた小野卓爾さん、この人は戦前の中央大サッカー部のOBで、彼がやはりワールドカップ国内開催にとても熱心だった。でも、自分が声をあげても誰も言うことを聞かないし、誰も動かないから、牛木、お前が動けとさかんに言われました（笑）。

めざましいサッカーの普及

――新聞の記事を読んで、本を眺めて、日本でもサッカーファンが育っていきました。選手になりたいと夢を抱いた若い世代もいたことでしょう。

ぼくが記者になったころは実業団にもチームはあったんだけど、同好会のようなもので、強いチ

ームはなかった。一口に言えば、当時のサッカーは「大学のスポーツ」という感じでした。

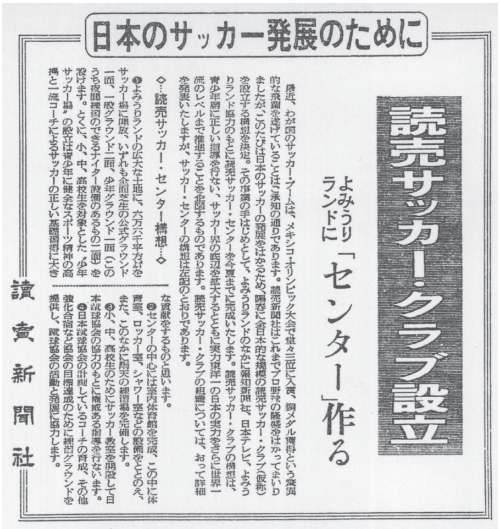
ところが、当時東京教育大学にいた多和健雄さんがサッカーの教育上の意義を唱えて、小学校や中学校の体育にサッカーを採り入れることを提唱したんです。多和先生は教育学の先生ですから、学校の先生方への影響力が強かったし、ぼくもいろいろ教わりました。そして1958年の学習指導要領改訂で、小学5年生以上の体育の授業にサッカーが採り入れられることになったんです。部活のなかにサッカー部を設ける学校もたくさんあったでしょう。全国で子どもたちがサッカーに親しむようになったのは、それからですよ。多和さんの功績は大きかった。

――それから10年ぐらいして、読売サッカークラブの創設に尽力されました。

ぼくの一番の功績は、読売サッカークラブを作ったことかな（笑）。さっきお話ししたように、ぼくは記者として外国のスポーツ事情をたくさん見てまわった。外国ではみんなサッカーを地域に根ざしたクラブで楽しんでいたんです。日本も自由に入れるクラブがあって、サッカーが好きな子、やりたい子が集まるといい。そんなクラブが日本にもできて、サッカーが文化として根付くといいだろうなと思っていました。

当時、日本テレビにいた笹浪さんもサッカークラブを作れとさかんにぼくに言う。ぼくは野津会長に「ぜひクラブを作りましょう」とアピールして、正力松太郎さんに会いに行ってもらいました。野津さんが「あなたはプロ野球の父と言われている。次はサッカーの父になってください。サッカー協会が応援するから」と言ったら「やろう！」ということになった。正力さんは外国の事情に詳しくて、サッカーが世界で最もさかんなスポーツであることもよく知っていた。だから、クラブを作ろうという思いは彼の中にもあったんじゃないでしょうか。それが1968年の11月ごろのことで、もう次の年の1月3日の読売新聞には、読売サッカークラブ設立の記事が載っていた（笑）（**写真4**）。

読売ランドにグラウンドを5面確保して、最初は子どもたちのサッカー教室を開きました。浦和高校や大学の出身者がたくさん集まって、先生になってくれました。当初は総合的なスポーツクラブの構想もあったんですが、サッカー以外は人が集まらない。集まっても先生がいない。サッカーは大衆化が進んでいたんです。


日本のサッカー発展のために

読売サッカークラブ設立

よみうりランドに「センター」作る

読売新聞社

写真4　読売サッカークラブ設立を報じる記事。「青少年層に正しい指導を行ない、サッカー界の底辺を拡大するとともに実力東洋一の日本の実力をさらに世界一流のレベルまで推進することを企図するものであります。」と謳われている。（読売新聞1969年1月3日朝刊1面）

――やがて日本にも全国リーグが作られますね。

さきほどお話ししたように、それまでサッカーは関東大学リーグ、関西学生リーグなどのように、各地の地域ごとの大学のスポーツだったんです。今日のJリーグにつらなっていく全国リーグを創設することは、クラマーさんもよく力説していた。日本からお国に帰られるときにも「これだけは必ずやれ」とクギを刺していきました。

当時、企業でスポーツをやっていた人たちも全国リーグには前向きでした。一番熱心だったのは古河電工、それと三菱や日立製作所でした。外国の事情に精通している人が多い企業は社内でも話がスムーズに進んだようです。

―― 1992年に読売新聞社を退社なさったあとは、大学で教鞭をとられたり、「牛木素吉郎＆ビバ！サッカー研究会」を立ち上げたりと、精力的に活動してこられました。書いて伝える、提言して動きをつくる。半世紀以上にわたってペンをふるわれたそのご努力が、日本サッカー界の発展の大きな力になった…。貴重なお話をありがとうございました。

2018年9月30日、東京・調布の自宅にて（冒頭の写真は2005年ごろ、ビバ！サッカー研究会の室で撮影）

聞き手：松元洋一、松島孝人



巻頭インタビュー２

次なる100年に向かって

小山冨士夫（昭和35年卒）

東京のビジネスの中心地・日本橋に本社をかまえる株式会社萬富（まんとみ）は弘化２（1845）年創業という東都のなかでも最も歴史ある企業の一つだ。その会長を務める小山冨士夫は昭和10（1935）年生まれ。生粋の江戸っ子で、現在もゴルフなどを嗜む。かつてはア式蹴球部でキャプテンとして活躍した。御殿下グラウンド、忘れられない一戦、LB会、これからの100年…思いの丈を語ってもらった。

練習前には、まずボール作りから

―― 100周年の記念誌のコンセプトは“東大ア式蹴球部、次の100年へ向けて”です。そのためには次の世代へ過去の歴史が正しく継承されることが重要かと考えます。なかでも伝統ある御殿下グラウンドの物語は、その大きな柱の一つです。

小山　まずは東京大学ア式蹴球部創部100年にあたって、最初にサッカー部を作られた、野津さん、新田さん、それから竹腰重丸大先輩を始め多くの先輩に感謝申し上げなければなりません。

おっしゃる通りで、ア式100年の歴史の中のある時期からは御殿下グラウンドと一緒に歩んだのですが、あの場所は部員や元部員にとって本当に特別な場所です。

御殿下のグラウンドには、ずっと地下の部室があったんです。グラウンドから降りてくる汗と砂と入り交じりの独特の異様な匂いがありました。その頃は今とはまるで違うボールでした。昔は牛革のボールにチューブを詰めておくので、最初に練習へ行くとまずボールを作る作業が待っているんです。チューブにポンプで空気を入れて牛革を膨らませて、その縫い目を縫うんです。本当に大変な作業でしたね。しばしば失敗してチューブに穴を開けて破裂させていました（笑）。最初から立派なボールがある、そんな若い世代にはわかってもらえないでしょうが…、練習は、まずボール作りから始まるんです。

――現在から考えると逆に貴重なお話です。小山さんはいつの入部だったのでしょうか。

小山　昭和31（1956）年に入部しました。まさに１年目のその秋に関東大学リーグ１部から陥落するのですが…。当時の監督は田村三郎さんでしたが、最後の試合が終わって降格が決まった時、円陣の中でハラハラと涙をこぼしていた田村三郎さんの姿が今も忘れられませんね。

部室は、昭和32（1957）年に御殿下の改修工事のため農学部がある場所へ移りました。今は農学部のグラウンドは東西にわたって使用していますが、当時は南北にわたって使っていました。グラウンドに向かって左側に野球場があって坂を下れば根津神社というところでしたが、そこに合宿所がありました。御殿下が使えない時に農学部を使っていたのですが、農学部はだだっ広くて、もの凄く硬いグラウンドでした。御殿下よりも硬いんですよ。御殿下は雨が降れば当時は泥沼になりましたが、農学部のほうは雨が降ると水たまりができます。処理が面白くて水たまりの真ん中に鉄筋を打ち込むんですが、鉄筋を抜くとシャーっと水がその中に入っていくんです。工学部の人がやり方を教えてくれました。そんな時代だったんです。

――やがて、それが人工芝になります。

小山　そうなんです。御殿下の泥んこのクレーが

人工芝に。やがて農学部のグラウンドのほうも今のように人工芝になっていきます。

なぜ東大サッカーは凋落したのか　どうすれば復活できるか

――お話を伺っていると旧制高校時代との関係が東大の強化に関係があるのでしょうか。

小山　東大のサッカー部というのは旧制高等学校がファームになっていて、そこから優秀な人材が送られてきたんです。一高や水戸の高等学校から須賀敏孝さんや大埜正雄さんなどの名選手が来ました。大埜さんは後に全日本選抜（日本代表）の選手になって、WMシステムのサイドハーフとして日韓戦などで活躍されます。我々の時代では昭和33（1958）年の天皇杯で監督として指揮を執られています。

今振り返ってみて、旧制高校があった時は華々しい活躍をしています。つまり人材がどんどんやってくる。旧制高校がなくなった戦後、サッカーが全国的に普及するとともに東大の地位は下がっています。

――小山さんから見て、東大サッカーが今一度復活していくためには何が足りないでしょうか。何をなすべきでしょうか。

小山　それはハートの問題です。ハートが燃えたら、気持ちが燃えたら、サッカーは変わっていきます。技術的な問題では決してありません。昨年（2017年）は一橋大学とやって完敗した試合がありました。あれは典型的な試合でした。一橋のほうが逆にハートを持って戦っていた。確かにそうだと今も感じています。

ただね、我々の世代がこういったお話をすると評判が悪いんです（笑）。精神力に頼っていて技術面をないがしろにすると。

客観的に見ていて、東京都リーグは1部も2部もあまり差はありません。技術的にもです。もっと俯瞰して見れば、大学サッカーはそんなに力の差があるわけではないので、その時の集中力で決まることがあります。集中力――これもまた若い世代には嫌われる言葉かもしれませんが（笑）、でも、集中力です。ピッチに立っている11人が同じ気持ちになることです。サッカーはね、そういうことがとても重要なスポーツです。

――今も試合は観に行かれているのでしょうか。

小山　昨年はなかなか時間が取れなかったですが、今年はずいぶん観に行っています。浅見さんもお越しになりますし、西野宏さんもお見えになっています。西野さんは僕らの先輩で、極めて有能なマネージャーでした。

――では、現在のチームをどのようにすれば強化できるとお考えでしょうか。

小山　これもあくまで私個人の意見です。今の練習はあまり見ていませんが、恐らく足りないと思うのがドリブル練習です。ボールを持って走るという練習が足りないのではないでしょうか。これは東大にかぎりませんが、みんなパスサッカーと称して、ボールがきたら隣に渡すという思想が多いです。それはある面、勝負から逃げているとも言えます。昔、竹腰重丸さんがこう言っていました。「ボールを持って走れ。最初はポンと蹴って走ってそれでいい。それをやっていると、だんだんボールのほうが足にくっついてくる。所謂ドリブルになってくる。それがボールコントロールだ」とね。今はドリブルの練習にどのくらいの時間を割いているのでしょうか。

――ほかには何がありますでしょうか。

小山　あと大事だと思うのはダッシュ、そして1対1です。1対1はサッカーの基本です。あとは運動量でしょうか。試合中の運動量はあると思いますし、昔の選手より走っている。でも、ずっと走っていたらダメです。やる時に走らないと。みんな基本的にはできていますから。基礎をやる必要はないんです。だからもっと強くなってもおかしくないはずです。

でもね、やっぱりハートの問題。“俺がやらなければ誰がやる！”というハートの問題が一番です。そして同時に冷静に周囲を見る。つまり「あの選手があっちから来たから、こっちから他の選手が来る」ということです。そこで頭を使え、となります。常に次を狙う、次を予測する。足元のテクニックだけでやっていたら負けるに決まっています。東大の選手にはその頭があるはずです。

故服部一郎監督の教え

――小山さんがお考えの東大ＬＢらしさ、東大サッカーらしさとはどういったものでしょうか。

小山　僕が思い描いているのは、テクニシャンなんかではなくて、もっとハートで固まっているようなイメージです。なぜ僕がこの言葉を繰り返し言うかというと、故服部一郎監督の存在があるか

らです。

服部さんは今から 12 年前、平成 18（2006）年 5 月 9 日に 70 歳で亡くなられました。服部さんは長い間監督をされていたのですが、そのモットーが『足を止めるな！　あきらめるな！　サッカーを楽しめ！』でした。この言葉はチームを応援する横断幕にもなっています。彼は座ってばかりいるんですが、いつも選手のことを自慢していました。「この集団は俺が考えているように一つにまとまり、意識として高まった集団である」ときっぱり言っていましたね。サッカーチームは逆に言えばバラバラでは意味がない。隣人のことが考えられないようでは意味がありません。今も多くの人から慕われている監督であり人物ですが、彼の考えは私がイメージする“東大らしさ”に通じるものがあります。

ただ、一つにまとまるのが仲が良いのではなくて、もっと核心に触れてというか、時には喧嘩するくらい仲良くなれればと思いますね。そのあたり物足りないと思うことがあります。サッカーチームが強くなるためには結構きついことをやらなければいけません。それを精神主義と言っているようではまだダメです。昔は山中湖合宿では、一周約 10km の山中湖のマラソンがありました。しかも 1 時間を切らないといけない。それをやれという意味ではなく、いろんな意味でもっと激しくぶつからないと上等な友情は生まれません。言葉だけでは限界があります。ぶつかり合う練習をしなかったら、真の友情は生まれないと僕は思います。

栄光と挫折の歴史。
そして、これからの 100 年へ

小山氏はおもむろに東大ア式蹴球部 90 年誌である『闘魂 90 年の軌跡』を取り出した。その中の第 2 部・年代誌、1959 年度（昭和 34 年度）のページ（注：146 頁及び 147 頁）を開き、右下にある一枚の写真を指差した。キャプションには“優勝決定戦　表彰式”とある。ほころんだ表情の小山氏が静かに語り出した。

小山　これね、僕なんですよ。優勝してカップをもらっているの。横山陽三先輩から頂いたのですが、学生時代、最初で最後の体験でした。この時は僕がキャプテンだったんです。

――随分、思い出深そうにご覧になっていますね。

小山　偉そうなことを話しましたが、僕らの時代、昭和 31（1956）年に初めて関東大学リーグ 1 部から降格したんです。つまり、負けた結果そうなった。だからこそ、いろんなことが分かるんです。

負けた後は必死に練習して、3 年後の昭和 34（1959）年に 2 部で優勝決定戦に勝利したのが、まさにこの写真なんです（43 頁）。これが、その時のトロフィーです。でもね、それから 4 日後に入れ替え戦を戦ったんですが、相手は 1 部最下位の法政大でした。でも、試合は 0-2 で負けてしまったんです。

――東大ア式蹴球部の 100 年の歴史は、まさに栄光と挫折の繰り返しなのですね。さて、さきほどもお話ししましたように、今回の 100 年誌のコンセプトは“これからの 100 年”です。小山さんは、今後のア式をどう見られていますでしょうか。

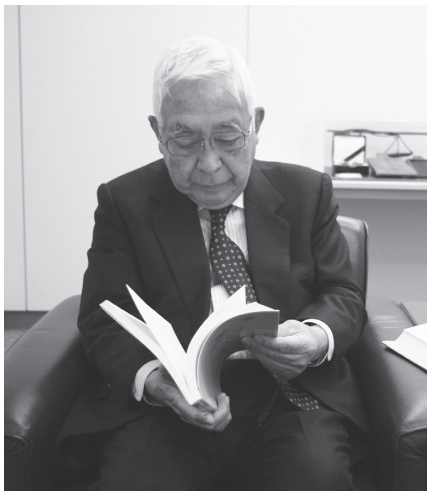
小山　厳しいことを言ってきましたが、割と明るく見ていて、将来に夢を抱かせるような人材がいるように感じています。体格のある選手やハーフの選手など、昔と違っていろんな学生さんが入部してきています。コーチ陣にも面白い人材が入ってきています。

昔から、不思議なことにア式にはいろんな人がやってきます。僕らの頃には室田くんという選手がいましたが、この選手は防衛大から入ってきました。非常に無口な男でしたが、何事も黙々とやっていくタイプでした。プレーも上手くて、全体的にちょっと下がり目でボールを持っていましたね。

――そのあたりも東大ア式の魅力かもしれません。東大ア式は多くの人を引き寄せるのですね。

小山　確かにいろんな人が来ましたね。ただ、僕はグラウンドに出ていましたから、すべて把握しているわけではありません。僕らの年代というのは、“負け”なんです。負けるという現実が重くのしかかっていたので楽しくなかったです。実は入れ替え戦の後、しみじみ泣きましたね、地下の部室で。ユニホームのまんま。1 年上のキャプテンだった髙田さんが慰めてくれた。「小山、よくやったよ、もういい、着がえろ。」

どんな試合でも負けた時の悔しさというのは、当人でないと分からないわけです。でもいつかは、なんとか関東リーグ 1 部にまでカムバックしてほしい。これは偽らざる本音です。今日のインタビ



が３試合だけ出たと記憶してい
して夏合宿から再登場してくだ
、１部リーグをたっぷり経験な
人の主力選手は３年生でフォワ
い身体でかならずしも頑健とは
妙なボールタッチと優れた状況
した。

を下す

めくくりに当たる京大戦は、京
戦い４―１で快勝した。
月25日に開幕。８大学編成、最
敗で過ごしたところで、主将の
の悪化で出場不能となり、小山
つ１年上で留年して５年生に在
さんに助けていただいて残り３
いにして２勝１分で、結局５勝
点首位となって、優勝決定戦を

グ最終戦のわずか３日後の12月
た。後半先行して２－１で日大

昭和35年卒業後、吉田、小山、山川が、翌々年野澤が富士通に入社して富士通が隆盛に向かった。昭和35年には関東４部であったが、毎年昇格して関東１部になった。現在の川崎フロンターレの基礎を築いたといえる。（小山冨士夫）



優勝決定戦　表彰式（上）、優勝決定戦　集合写真（下）



『闘魂90年の軌跡』147頁。上の写真の右端が小山。



昭和34年関東大学リーグ2部優勝イレブン。
後列左から、松村、室田、長浜、服部、三浦、
前列左から、高場、山本、小山、名越、吉田、野澤

ューの前に過去の歴史を今一度読み返してみたんですが、当時の上妻達也さん、俵新さん、小柳望さんのような選手、あるいはそれ以上の選手が出てきて、東大サッカー部が復活して欲しい。実は上のカテゴリーとの差はほんの僅かな差、だから出来ないわけはないと思います。

LB 会の存在理由とは

―― LB 会の今後についてはどのようにお考えでしょうか。

小山　多くの方々や関係者にＬＢ会をずっと支えてきて頂き、今年は無事に 100 周年を迎えることが出来ました。これには本当に感謝しております。

ＬＢ会とは何なんだというところから始まって、以前はコーチ派遣をずっとしていましたが、もっとインフラに力を入れようということになりました。OB 会の活動も大事ですし、そういった活動は辛抱強く続けて行くことで良い流れが生まれるものです。今後はいろんな活動を引き継いでいって欲しいです。

――今後の 100 年に向けてのメッセージを頂けますでしょうか。

小山　上等なことは言えないんです。でもね、歌の文句ではないですが、輝けるものを背負って東京大学に入ったんだから、みんなプライドを持っています。それを変にひけらかさないで地味にプレーに没頭するということが大事です。この 10 年間で新しく出来た女子部も、これは同じです。そして若い世代にＬＢ会の活動を今後もしっかりと継続していってもらいたいと切に願っています。

2018年4月10日、東京・中央区の（株）萬富にて

聞き手：上野直彦



巻頭インタビュー３

ア式でキャプテンを務めるということ

鹿園直毅
（ア式昭和 63 年卒　大学平成元年卒）

東大卒業後、平成６年に博士号取得、日立製作所機械研究所に入社し、平成 14 年から東京大学工学系研究科助教授、平成 22 年から東京大学生産技術研究所教授。専門は、固体酸化物形燃料電池、新規蒸気サイクル等。平成 25 年より東京大学運動会ア式蹴球部部長を務める鹿園に話を聞いた。

忘れられない関東大会での千葉大戦

――ア式蹴球部に入部された当初はどのような印象だったのでしょうか。

鹿園　まず、東大ア式蹴球部創部 100 周年本当におめでとうございます。こういった機会にお話が出来ることを大変嬉しく思います。

入部した時は最初からレギュラーになるつもりで、「自分が部を強くしてやるんだ！」くらいの気持ちでいました。でも、やっぱりスピードやパワーが高校時代と全然違っていて、甘くなかったです。体がデカい先輩も多かったですね。ただ、技術ではあまり負ける気はしませんでした。

僕らの世代くらいから小学校からサッカーをやっていた人が増えてきて、裾野が広がってきたと思います。それまでは中学校くらいから始める人が多かったので。そんな中で、春の春季対抗戦など最初から試合に出場させてもらったりしましたが、結構怪我などが多かったのが実状でした。5 年間を通じてベストな状態でプレー出来たのは入部したての数カ月くらい、１年生の春が自分の印象では一番体の調子が良かったという感じです。

――個人的に忘れられない試合は何でしょうか。多くの OB の方は各世代の入れ替え戦をあげられていますが。

鹿園　僕らも３年生の時に関東リーグとの上の入れ替え戦がありました。１位が慶應で僕らは２位でした。入れ替え戦は引き分けだったのですが、規定上ダメなんです…勝たないと上がれません。

この試合ももちろん印象に残っているんですが、私自身はその翌年の４年生のときの関東大会の千葉大戦が忘れたくても忘れられない苦い思い出です。このときは、前年主将の鈴木修二さんが残ってくれて、佐藤哲治さん一人抜けただけでレギュラーがほとんどそのまま残ったんですね。これは絶対行けると皆が思ったんですが、関東大会では１回戦で負けてしまった。千葉大に負けてしまいまして…あの時のショックは大きかったですね。自分がキャプテンをやっていたんですが、絶対上がるつもりでやっていました。でも、負けてしまった。

キャプテンを務めた１年間から見えたこと

――キャプテンを１年間務められました。そこで苦労した点、気づいた課題は何だったでしょうか。

鹿園　とにかく関東リーグに上がる、それが全てでしたね。そのためだけにやっていた。だからほとんど学校には行ってなかったんですよ（笑）。それで大学を１年ダブってしまいました。その１年間はサッカーしかしなかったですね。結果的には、それがよくなかったのかも知れませんが。親

には大変迷惑をかけましたが、今振り返れば自分にやれることはやりきった気がするので有り難かったです。

僕は東大が都リーグ２部に初めて落ちた年に入部しました。１年目は上がれずに２年目で優勝し、１部に上がりました。入れ替え戦に行った３年目は、どちらかというと守って耐えて速攻というプレースタイルで結構成功したんです。昔ながらの東大らしく、ずっと守って、ひたすら耐えて、というのがとにかく徹底していた。３年目の時はそういう強さが発揮されて、最初は全く考えてもいなかった入れ替え戦にまで行けました。

４年目はもっと横綱相撲のような戦いをしたいということで上を目指しました。自分たちでボールをキープして押し込んでいく形です。リーグ戦は首位の立正大と得失点差の２位となり、結果オーライで関東大会には出られたんですが、実際のところチームの状態は良くなかったです。案の定、関東大会の一回戦で負けてしまった。今振り返ると、そこまでやり切れる実力がなかった。関東大会で負けた相手の千葉大の戦法が１点を守って勝つスタイルでした。前の年に東大チームが成功したスタイルの相手に負けるという皮肉な結果になってしまいました。当時の監督だった平林健一さんは僕ら以上に心血注いでくれていたので、一緒に喜べなかったのは今でも本当に残念に思っています。今、同期の利重君が総監督をしているので、当時できなかったことを実現してくれると嬉しいです。

自分の中ではかなり引きずってしまい、20年くらいサッカーからちょっと心が離れてしまいました。最近シニアサッカーを楽しむようになり、千葉大に負けた駒沢第二グラウンドで約30年ぶりに試合をする機会がありました。やっと吹っ切れてきた気がします。

――鹿園さんは部長を2013年から５年間務められています。その頃のア式はどのような順位、どのようなチーム状態だったのでしょうか。

鹿園　部長になった時は東京都１部の中でも結構強かったですね。ボール保持率も高かったし、メンバーも揃っている感じがしましたね。でも、周りが強くなってきているという状況でした。亜細亜大や帝京大は僕らの時代から同じリーグで戦っていましたが、新興の玉川大、武蔵大や大東文化大なども上に上がってきている。どんどんリーグが厳しくなっている状況でした。部長になったのが2013年、５年間で２回２部に落ちました。

――鹿園さんたちの時代と今の時代では何が違いますでしょうか。

鹿園　状況が全然違うので比較はできませんが、プレーの印象で言うとあまりドリブルをしないですかね。あと、スライディングもあまりしませんね。僕たちの頃はパスがうまく出来なかったというのもあるかもしれないけど。外野雅彦君というとてつもなく馬力のある鹿児島の国体キャプテンだった選手がいて、十人で守って一人でドリブル突破して点を取ってくるパターンでした。

守備で無駄にスライディングする必要はないんですが、僕らは下手だという意識があったから、そうでもしないとボールが奪えない。スライディングについては、僕らより上の先輩たちはもっと凄かったですね。



京大とのOB戦のときの集合写真。前から2列目の右から2人目が鹿園（2016年7月17日）。



昭和63年卒の同期
後列左から、金子、利重、末永（孝）、浜田、湯原（旧姓谷本）、外野、山本、
前列左から、今井、久保田、鹿園、末永（浩）

――小山冨士夫さんにお話を伺った時も、今のア式にはドリブルが少ないとおっしゃっていました。

鹿園　ドリブルも含めて、サッカーは最後の最後は個人で頑張らなきゃいけないじゃないですか。点を取るところも、守備のところも。何がなんでも点を取るという強引な奴がいないと試合には勝てません。

それと今は都リーグでも守備が固く、かなりコンパクトです。私大が昔に比べて真面目に守備をするようになりました（笑）。昔は国立の真面目な学校か、私立でも立教大や上智大くらいしか真面目に守備をしなかったんです。今はどこも勝負にこだわるようになり、東大らしさが出しにくくなってきている。昔はそこで差別化できたんですが。

サッカーにおける“東大らしさ”とは何か

――鹿園さんが考えられる、サッカーにおける「東大らしさ」とは何でしょうか。

鹿園　昔は、足技は劣りますが鍛えて体力で何とかする。あと守備ですね。とにかく連携しての守備です。個人の力で突破が難しくてもガチガチに守ったり、トレーニングで頑張っていく。このあたりが昔の「らしさ」でしょうか。体力練習とかは僕らの頃は結構やりましたね。練習の半分くらい体力トレーニングでした。今は他チームと体力での差別化が難しいと思うので、攻撃も連携して攻めるという感じでしょうか。

あとは試合での集中力ですね。短期決戦のリーグの時のほうが東大チームの良さを出せる気がします。秋のリーグ戦だったころは、とにかくそこにピークを持っていく。夏から秋に向けてコンディションをグーッと上げてやるやり方のほうが東大は多分強いように思います。

――メンタル面での東大らしさは何かありますか。

鹿園　サッカーは裾野の広いメジャースポーツなので、メンタルの最新理論など、プロのほうが進んでいるでしょう。昔、大学サッカーが強かったころは、東大が新しい面を出せたと思うんですが、今はなかなかそういうのも難しくなっています。他の大学がやっていないこと、人がやっていないことを失敗を恐れずにやってみる。こういったことを積み重ねていくしかないと思います。

――OBはどう関わっていけばよいでしょうか。

鹿園　一番は現役が最大限の力を出せる場を僕らOBが用意してあげることです。現役がサッカーに集中できる環境づくりは、上の世代の務めです。

僕が現役の時に読んだ『闘魂』第３号に、一回り歳上の柴田敏之さんや池森俊文さんたちの世代が書かれていた文章があって、「どうやったら勝てるか？」という悩みが一通り書いてあるんです。昔も全く同じような悩みを持たれていたんだなと当時思いました。今の現役も同じだと思います。時間は重なっていないけど、そういう思いがつながっていくんだと思います。

とにかく今の若い人たちにサッカーに集中してもらえるようOBとして努めていく。そういったDNAみたいなのが上の世代からずっと続いている。多分これからも続いていくでしょう。若いOBは仕事や家庭が忙しくてちょっと来られないでしょうが、僕ぐらいの50代とか40代で子供の手が離れたら、また皆集まって支援できればよいと思います。

これからのア式蹴球部が目指すところとは

――今回の100周年誌のコンセプトは“これからの100年”です。鹿園さんは、今後のア式をどう見られていますでしょうか。

鹿園　個々人のレベルではあまり変わらないんじゃないかと思います。でも、それでよいんじゃないかと。ア式でいろんな経験をして、挫折して、皆卒業していく。後悔や経験をバネにして成長していく。卒業したら、先ほどの話のように同じような思いを持ってもらってOBとして現役をサポートしていく。これが途絶えずに続いていって欲しいですね。

――チームの目標としては、どこを目指すべきでしょうか。

鹿園　一つでも上のリーグを目指してやるプロセスというのが貴重だと思っています。仮に学生チャンピオンになったとしても、プロも含めたら日本一でもないし世界一でもない。目標は人それぞれでよいと思うし、本当に全力で挑戦してもらって、何が足りないのかとか、自分の実力とか実感して欲しいです。本当に身に染みて感じる経験なんてあんまりないことです。

――ここ数年で見られた試合で印象に残っている試合は何でしょうか。

鹿園　全部の試合を見ることはできていませんが、引き分けでしたが昨年のリーグ後期の最初の亜細亜大との試合は結構印象に残っています。リーグ前期は結果が出ず、みんなが悩みながら縮こまってプレーしていた印象だったのが、後期最初の試合で吹っ切れたように上手い下手を超越した闘う気持ちが伝わってきました。自分が4年生のときと似ている感じだったので印象に残っています。開き直って出来ることに集中したときには、結果もついてきた気がします。そこに至るまでの苦しみがあってこそですが、それを乗り越える経験はなかなか出来ないことだと思います。

――東大サッカーはどうすれば強化できますでしょうか。また大学スポーツの未来はどのようなものだとお考えでしょうか。

鹿園　学生数から考えて、サッカーをやっている高校生全員に「東大ア式でサッカーをやりたい」と思ってもらえるようになれば、かなり強くなると思います。とてもやりがいのあるところだということを何とかして知ってもらえると良いのですが。

また一度全て疑ってかかるというのも重要だと思います。例えば試合中に歌って応援するのはOBとか父兄に任せておいて、現役はグラウンド四方から戦術的なアドバイスができないかとか考えたら面白いのではないでしょうか。他のスポーツを研究して良いところを取り入れるというのも重要だと思います。股割りすれば怪我も減るでしょうし、頭の高さのボールを足で後ろにパスできるようになるかも知れませんし、抜かれた後も足が届くかもしれません。遠投を強化してロングスローでペナスポまで投げる人材を育てるとか、うまくいかなくても損はないので色々試してみたら面白いと思います。

一般論として大学は産業界への人材供給が大きなミッションの一つなので、スポーツ産業や地域振興といった分野が伸びてきている中で、そのような産業の教育の実践の場としての意味があると思います。東大の場合は戦術やスポーツ医学の研究の場としても進められると面白いと思います。

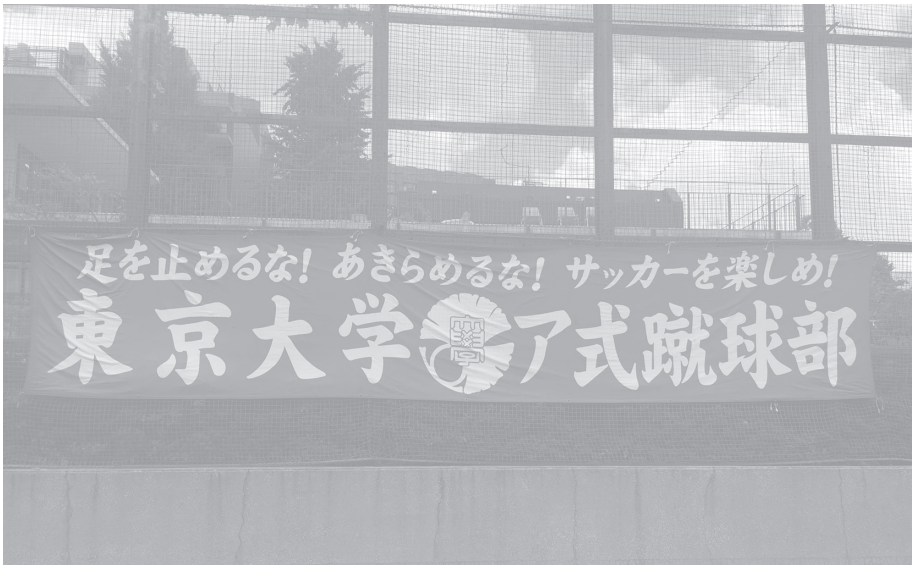
――明治時代から各ジャンルでパイオニアだった東京大学、サッカーも例外ではないと思います。大学サッカーの中で、どのような面で今後イニシアチブを取っていけるとお考えでしょうか。

鹿園　サッカーは日本でもメジャースポーツになってしまったので、リーグ戦の結果だけで東大の存在感を上げることは益々難しくなってきているのは仕方ないと思います。

日本で最も有名な大学だというポジションを活かせると良いですね。例えば単なる思い付きですが、スーパーラグビーのように海外の有名大学と独立対抗戦を作ってしまうとか。スポンサー探しにおいても、OBのコネもありますし、東大は他に比べて有利なポジションにいると思います。

2018年4月13日、東京大学・駒場第IIキャンパスにて

聞き手：上野直彦


足を止めるな！ あきらめるな！ サッカーを楽しめ！
東京大学ア式蹴球部